

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【タイトル】

超能少年テレキスこうき

## 【作者名】

井坂 環世

## 【あらすじ】

突如訪れた死。

与えられたのは再び生きる権利。手に入れたのは念動力という力。

前の世界に未練も後悔も残しているけれども……。精一杯今を生  
きるように……。大切な人を護れるように……。

超能少年テレキスこうき、始まります

## プロローグ

意識が浮上していく感覚、それを感じ取った。眠りから覚めるような、自分が今、瞼を開けようとしているのがわかるそんな感覚。そしてその一瞬後に眩しい光を瞼越しに視認して完全に意識が覚醒する。

「じじは・・・？」

その『男』の目に入り込んできた光景はまるで会議室のような、というよりは、長机に椅子、ホワイトボードがあるその空間はまさしく会議室そのものだ。

「じじじじじじだ？」

そう『男』が疑問に思つのも無理はない。『男』は仕事を終えて帰宅している途中だったからだ。それが気が付けばこんな場所。むしろ取り乱さないのを褒めるべきだろう。もっとも許容量が天元突破して、呆然としているだけだが。

と、そんな時。不意に後ろの扉が開いたような、そんな気配を感じた気がして『男』は後ろに振り返った。果たしてそこには、白いYシャツに黒のスラックスを着て、サングラスを掛けた男がいた。もっとも普通の人間では放てないような威圧感？カリスマ？のようなものを放っていたが。

「よう。気が付いたか？いや聞くまでもねえか。じゃあさっそく説明に移らしてもらつが構わないな？異論は認めねえ。」

サングラスの男、長いので以後グラスさんと呼称するが、その男が『男』に向けてそう言った。まあ、『男』も現状の説明をしてもらいたかったので別に異論はない。

「まず初めに認識して欲しいのはお前が死んだということだ。これは嘘でも虚偽でもなく純然たる真実だ。」

その言葉をきっかけにして『男』の脳裏にある映像が浮かびあがった。見覚えのある風景。『仕事場』からの帰り道だ。目の前には狂ったように笑う、いや笑い続ける女。その手には真っ赤に染まった包丁が握られている。そして自分の胸から広がる赤いシミ。道路にもそれが広がっていつている。そこで徐々に薄靄に包まれていくように視界が狭まっていき……。

「う……ぐ、あああああつつつ  
!!!?」

明確な自身の死の記憶（ビジョン）を思い出し、その時の痛みと恐怖も思い出してしまったために錯乱状態になる『男』。

「おら、落ち着け」

グラスさんの軽いデコピンが『男』の額にあたった。ピシッという擬音が似合いそうな軽いものだったにも関わらず、『男』は正気に戻った。いや、戻された。

「そうか……。俺は死んだか……。」

「自分で正気に戻しておいて言うのもなんだが冷静だな？」

「いや……。そんなことはない。無理に平静を装ってるだけだ。」

真実その通りであった。『男』の人生ははつきり言って絶頂期にあった。仕事は自らの大好きなことをやらせてもらっていたし、収入も多かった。達成感も充実感も多かった。なにより、最愛の婚約者が

いた……。これから、これからさらに幸せになっていくことが出来るはずだったのに……。あの狂った女のせいで全てぶち壊されたのだ。はつきり言って女に対する怒りと、人生が終わってしまったことに対する悲しみ、そして婚約者に対する罪悪感でいっぱいだった。今すぐにも喚きたくてもうがなかったが、目の前のグラさんの話を聞かなければ、という思いでなんとか踏みとどまっていた。

「そうか。じゃ、説明を続けるぞ。」

グラさんのその態度はそっけなかったが、今はそれがありがたいよ  
うな気がした。

「まずだ。俺は何者なのか？これを知ってもらわないと話が前に進まない。まあ、端的に言つと俺は神だ。」

「はあ？」

『男』が素っ頓狂な声を上げたが……。まあ仕方ないだろう。

「神様？God？」

「ま、その認識であつてる。」

そういうグラさんの姿を見てなんとなく、ストンと「神」という言葉が腑に落ちた。グラさんが放っている雰囲気は「嘘ではない。」と認識させた。それに先ほど強制的に正気に戻されたし。

「さて、何故、神である俺がお前に会っているかというと。」

「さあ？」

「お前を転生させるためだ。」

今度こそ『男』は啞然とした。開いた口が塞がらないとは正にこのことだろう。ていっつか実際に口を開けているし。

「転生ってあの輪廻転生？」

「そうだ。もっとも、記憶はもったまま転生してもらうことになるが。」

「なんで？」

まさしく『男』の頭の中はその疑問でいっぱいだった。なぜ？なにゆえ？Why？

「ふむ。まあ色々事情があるが……。簡単に言うと選ばれたからだな。」

そこでグラさんが詳しく事情を説明していく。その内容ははっきり言ってびっくりさせざるをえないものだった。

「つまり、神様の世界のTVで「転生した人間のドキュメント番組」を放送するために、その時点で死んだ人間の魂の中からランダムで選ばれたのが俺だと。」

「その通りだ。決してミスをしたりしてお前を死なせた訳じゃないから誤解しないように。俺のプロデューサー魂に誓って言うが。」

(あ、プロデューサーだったんだ。)

「さて、転生するにあたって、お前には特典を与えよう。」

「特典？なんだそれは」

『男』が疑問の声を上げる。特典と言うからにはもらっておいて損はしないだろうが……。

「番組を面白くするための特殊能力だ。」

「特殊能力？」

「そうだ。番組の方針、例えば、転生者の恋愛とかを見たいなら別に与えたりはしないのだが。」

「つまり、今回の番組の方針は転生者のバトルを見たいと。」

「そうだ。だから、あくまで戦闘に関する能力に限るぞ？ま、転生してからどう生きるかは、お前の勝手だが。ま、希望を言うなら視聴率を稼げるように面白おかしく生きてほしいがね。」

その言葉に『男』は驚いた。なにせ相手は神様である。運命を弄くるなり、魂に仕掛けを施すなり、無理やり戦わせることも不可能ではないだろうに……。これも彼のプロデューサー魂なのか。

「で、何にするんだ？特典。」

「え？俺が選べるのか？」

「そうだ。お前が把握できてる能力のほつが、説明する手間が省ける。ま、行く世界に合わせて調整しなければならぬが、今回はその調整が比較的楽な世界に行かせるからな。あ、もちろんバトルありの世界

だぞ？」

「そうか……。どんな世界なんだ？」

「アニメにあるような、剣と魔砲とSFの世界だ。」

剣と魔法とSF？それって明らかに危険な匂いがする単語なんだが……。っていつか魔法とSFは同居できるのか？と『男』は思った。そして、この特典をきちんと考えて選ばなければヤバいとも。

そして、しばらく熟考した『男』が選んだ能力は、グラさんの予想を裏切った。

「漫画『サイレン』に登場するグラナ、グリゴリー号だな、その男並みの念動能力（テレキネシス）をくれ。」

『男』はジャン 卒業生だった。ちなみに、『サイレン』が分からない読者のために補足しておく、グラナのテレキネシスは太陽光を捻じ曲げるほどの出力と、約1分足らずで数十メートルの塔を建てることのできる精密製を誇っている。

「なぜその能力を？同じジャ プならワ ピースとかナ トとか他にも色々あつたらろつに。」

神様の世界でも ヤンプは認知されているようだった。それはともかく。

「テレキネシスは確かに単純で、超能力の代表格だけど、シンプルだから色々なことに応用が利くし、弱点という弱点もない。だから選んだ。ド ゴン ールの気もそうだけど、あんな巨大すぎる力があつたって困るからな。」

そもそも、グラナ並みの出力があったら応用も弱点もクソもない気がするが……。それはともかく。

「ふむ。では特典は漫画『サイレン』のグラナ並みのテレキネシスというところではないな?」

「あ、成長の余地もあつたら嬉しいかな。」

この『男』、ただでさえ莫大な出力を誇っているのにさらにそれを上げようとしてやがる。どこの最終兵器になるつというのか。

「いいだろう。ではその条件で特典としよう。ではそろそろ転生の時間だ。これで話は終わりだしな。」

「そうか……。じゃあもう会うこともないだろうけど……。また今度。」

「お前が俺に会うとしたら死んだ時なんだが……。まあ、いいだろう。また今度、だ。」

そうして『男』の意識が薄れていった。こうして『男』は剣と魔砲とSFの世界、『魔法少女リリカルなのは』の世界へと転生することになったのだった



## 第1話

チュンチュン、チュンチュン、その音を聞いて意識が浮上していく。瞼を2、3回開けたり閉じたりした後、その少年は上半身を起こした。

「ふああ……。」

そうやって伸びをしながら欠伸をする少年、名前を宮崎光輝という。「転生した人間のドキュメント番組」を作るために転生させられた『男』だ。容姿ははっきり言って整っている。日本人の美少年代表、と言っても誰もが納得するだろう。もっとも今の歳が8歳、小学3年生なため、かつこい、というよりは可愛い、と形容したほうが正しいだろう。しかし、成長すれば間違いなくイケメンとなる、そう思わせるには十分すぎるが。

少年は頭をガシガシとかいた後、机の上に置いてある時計を見て、いつも通りの時間に起きたということを確認するとベッドから立ち上がり。寝巻きのまま自らに当てられた部屋を出た。そして、ダイニングには入った。

「おはよう。」

そう光輝に挨拶をしたのは、光輝の父である宮崎一輝である。とある家電製品メーカーに勤めているサラリーマンである。挨拶や食事時のマナー（といってもそこまで厳しくない、食事を残さない、などといった基本的なことだが）には口を出すものの、基本的な光輝の教育方針は自由にやらせるといった放任主義な父親だ。

「おはよう、光輝。もうすぐ朝ご飯できるからね。」

そう台所から話しかけてきたのは、母の宮崎友香だ。専業主婦であり、宮崎家の家事を一手に引き受けている。趣味は家庭で出来る健康法や、節約の仕方などが書かれている本を読むことだ。もともと、それを実践しているところを光輝は見ることがない。ちなみに結構な教育ママで、光輝にはいい大学をでて一流のメーカーに勤めてほしいと思っっている。

ちなみに、ここまで描写しておいてなんだが、この二人はこの話以降に出番があるかどうかはわからないのである！（どーん!!）

「おはよう。父さん、母さん」

そう返事をする光輝。転生者であるものの、小さいころからの二人と一緒にいるため、二人を父、母と呼ぶことに違和感はない。

それから食事が出来るまでの間に自らの飲み物（ネスレのコーヒー）を準備する。

「はい、出来たわよ。光輝、運ぶの手伝ってね。」

「はい。」

そうして出来た食事を食卓に並べていく。今日の朝食はトーストにスクランブルエッグ、サラダ（昨日の残り）という、普通〜の朝食だ。

「いただきます。」

そうして手を合わせてから食事を開始する。朝であるため会話数は少ないものの、悪い雰囲気ではない。テレビのニュースでやっている天気予報や占いなどのことを話題にしながら食事は進んでいく。

「「」馳走様でした。」

そうして食事を終えると、おのおののやることに入っていく。一輝は出勤のための準備。友香は朝食の片付け。そして光輝は学校へ行く準備だ。歯磨きを終え、着替えると準備完了。ランドセルの中身はタベのうちに準備を終えてるため気楽なものである。

「いってきま〜す。」

「はい、いってらしゃい。気を付けて行くのよ〜。」

「バス通学なんだから物騒なことは起こらないって・・・。」

「それもそうね〜。でも帰りのときとかは違うでしょ？」

「わかったよ。じゃ。」

「鍵は掛けていってね〜。」

そうして外にでる光輝。言われた通り鍵を掛け、バス停に向かう。その姿は家の中のものとは違っていた。雰囲気が違うとかそういうものではなく。本当に見た目が変わってるのだ。

「聖祥大付属小学校前〜、聖祥大付属小学校前〜。」

そのアナウンスとともにバスのドアが開き、乗客が降りていく。もっとも、ほとんどが聖祥大学付属小学校（今後は聖祥と書く、ぶっちゃけめんどい）の生徒なため、全ての客が降りるのに時間が掛かつ

てるが。そんな小学生の洪水の中を光輝も歩いていく。はつきり言ってその姿は浮いていた。周りの小学生が友達を見つけ、楽しそうに談笑してるなか、光輝だけが一人で歩いていつているからだ。

光輝に友達がいないのには理由があった。それは光輝の見た目だ。美少年だから孤立している？そうじゃない。別にそういう訳じゃない。ただ単に光輝の髪型が問題なのだ。聡明なる読者諸兄は知っていると思うが、髪形、というのは人に与える印象にかなりの影響がある。顔が並のフツメンでも、髪型をきちんと整えていればかつこよく見えるものだし、逆にイケメンでもボサボサの髪型だと、「うわぁ」と、引かれること請け合いだ。それほど髪型というのは人の第一印象に関係してくる。では光輝の髪型は？と聞かれると、異様だった。後ろは大体肩にかかるくらいまで伸ばしている。というよりは「切るの面倒臭えからここまで伸びた」という感じだ。そして何より目を引くのは前髪である。長い、そして左右に分けているわけでもない。完全に顔が隠れていた。唯一見えているのは口だけだ。暗闇で見かけたらお化けだと間違えられそうな髪型だった。

人は自分と違うものを排斥する傾向にある生き物だ。こんな髪型をしている光輝が避けられるのは自明の理だった。もっとも、避けられるだけで、イジメに発展しないあたり、この学校の生徒には教育が行き届いていることが伺えるが。

(はぁ・・・)

光輝は内心溜息を吐いた。光輝は転生者である。ゆえに小・中学校の時間がどれだけ貴重で得がたいものか知っている。が、それはそれ、これはこれ。小学生に混じることに憂鬱を感じないわけではないのだ。授業が退屈なのはまだいい。そんなのはどこの学校、いつの年頃でもそんなものだからだ。ただ、友達がいない、否、作れないために学校はひどくつまらないものと化していた。やはりどんな年頃で

も、たとえ精神年齢が違っていても、友達と遊んだり、馬鹿なことをするのは楽しいものなのだ。

と、一人でぼーっと歩いているうちに、自らの教室に着いていた。どうやら無意識のうちに上履きなどに履き替えていたようだ。習慣、というものは怖いものである。

ガララツ、と扉を開けて中に入る。すると、クラスにいた全員が一瞬こちらをみるが、すぐまた友達との談笑に戻っていった。これが光輝のクラスでの立ち位置を端的に表していた。所謂「いてもいなくてもいい、風景の一部としてしか認識されない、空気のような存在」である。そのことに思うところが無いわけでもないものの、今のこの状況の原因は自分にあるので、光輝は黙って自分の席に着くと、ランドセルから本を出して読み始めた。ちなみに、内容はジャプの漫画のノベライズ化したものである。この世界にもジンプはあったのだ。

「おはよ……」

と、その時クラスに元気な女の子の声が響き渡った。そして、その声にクラスの皆（光輝除く）も挨拶を返していく。それだけでその声の主が慕われていることが伺えた。

その声の主の名前は高町なのは。栗色の髪を頭の左右でまとめている。ツインテール、というにはちょっと足りない長さのあまり見かけない髪形だ。顔立ちは整っている。くりっとした目は彼女が心優しい性格をしていることを一目でわからせてくれる。また唇は綺麗なピンク色をしていて、全体的に小動物のような雰囲気纏っている可愛い女の子だ。将来は確実に美人になるんだろうなあ、と光輝は頭の片隅で考えながら、声の主、高町なのはから本に視線を戻した。

と、高町なのはの後ろから新たに二人の女の子が教室に入ってきた。

た。一人は金髪をいわゆるツリーテールという髪型にして、碧眼で勝気  
そうな雰囲気を纏っている。もう一人は紫にもみえなくもない  
ウェーブがかかった黒髪に白いカチューシャ、黒曜石のような黒い瞳で  
深窓のお嬢様といった雰囲気だ。二人ともかなりの美少女である、と  
いう点は共通している。

金髪碧眼のほうがりサ・バニングス、黒髪カチューシャが月村す  
ずかといって、先の高町なのはを合わせて仲良し3人組だ。全員美少  
女の大変目を引く3人娘である。もっとも光輝にとっては3人とも  
ただのクラスメイト、ぐらいいの仲だ。

そうして続々とクラスメイトが集っていくなか、それでも光輝に話  
かけるものはおらず。光輝も誰かに話しかけることはなく。ずっと  
本を読んだまま朝のチャイムがなった。

「皆、席に座れ。朝のHRを始めるぞ。」

そうして担任が入って来て、HRの始まりを告げた。連絡事項は聞  
き逃さないようにしながらも、ぼーっと話を聞く光輝。いつも通りの  
学校生活が始まった。

## 第2話

キーンコーンカーンコーン

「今日はこれまでーじゃあ、気を付けて帰るんだぞ。」

《はーいー!》

担任のその言葉に元気よく返す生徒たち。しかし、すぐにわいわい、ガヤガヤと友達同士で集まって会話してる姿を見る限り、効果はあまりないようだ。

そんななか、光輝は手早く帰る準備を終える。

「アリスちゃんとすずかちゃんは今日はバイオリン教室だった？」

「ええ、そうよ。」

「なのはちゃんは？」

「じゃはは、私は今日はお店の手伝いかな。」

そんな会話を背中に受けながら、光輝は教室を出た。学校に残って  
もやることがない為、さっさと帰宅するにかぎる。

そうして家に帰った光輝だが、別に趣味がないわけではない。光輝の趣味、それは読書である。特に、兵法書の類いをよく読む。これは意図してできた趣味ではなく、また前世から続く趣味ということもない。これは光輝なりの対策だったのだ。バトルなどやるつもりは微塵も無いが、巻き込まれる、という可能性もある。特にこの世界は剣と魔法の世界だという。そういうのは日常が唐突に非日常に変わる、というのがお約束だ。だから、今が平穏だとしても、対策しておくに越したことはない。故に、戦闘の際の心構えを身に付ける為に読み始めたのだが、戦闘以外でも為になるようなことも多く書いてあり、はまっていったのだった。そうして趣味に「読書」という項目が追加されたのだ。

と言っても未だに子供の身、そう自由に出来るお金もなく、家に帰ったら荷物を置き、着替えて図書館に行くのが光輝の日常だ。

「いってきます。」

「いってらっしゃい。」



黒と赤のストライプのポロシャツにジーパンに着替えた光輝は、図書館へ向かう。しかしその足取りは明らかに軽く、朝学校に行く時とは大違いだ。図書館に行くのが楽しみ、というのが良くわかる、というものだ。

図書館に着いた光輝は早速自らのお気に入りのコーナーに向かう。そうして手に取ったのは「孫子」。かなり有名な兵法書で、内容は知らなくとも、その名前を聞いたことのある人も多いだろう。光輝も愛読しており、もう何回も読んでいる。

(敵を知り、己を知れば百戦危うからず、か)

そうして光輝は本を読むことに没頭していく。小学3年生が分厚い兵法書をかなり真剣に読む様ははつきり言って異様だったが、そんなことに光輝が気付く筈もなかった。

と、そんなとき、不意に光輝の肩を誰かが叩いた。読書を邪魔された光輝は不機嫌です、という雰囲気を出しながら振り向く。そこにいたのは茶色の髪をショートボブにし、愛嬌のある顔立ちをした少女だった。しかし、少女を構成するパーツの中で最も目を引くのはその美少女と言ってもいい顔ではなく、車椅子だろう。何らかの障害を患っているのは明らかだった。

「じゅくん、何読んでるん？」

「なんだ、はやてか。」

「なんだ、ってなんやねん。」

「別に。」

聞いただけでは仲が悪いのか、と思ってしまいそんな会話だが、二人の醸し出す雰囲気は二人の仲が良いのだと分かせてくれる。学校では絶対に出さないような空気を光輝は出していた。

この少女の名は八神はやて。光輝の唯一の親友である。前述した通り、車椅子生活を余儀なくされており、そのせいで学校も休学中だ。故に同年代と触れあう機会も少なく、はやてにとつての友達も光輝一人だけだ。

「で、結局何読んどるん？」

元の質問に戻るはやて。別に隠す事でもないの、光輝は素直に答えた。

「孫子だよ。」

その答えにはやてはあからさまに呆れたような顔をする。なぜなら先ほど述べた通り光輝は孫子を何回も何回も読んでるからだ。

「飽きひんの？」

それは恐らく誰もが疑問に思う事だろう。まあ、返ってくる答えなどわかりきっているが。

「別に。とても為になることが書いてあるし。」

実際、孫子はとても為になる。紀元前500年前頃に書かれ、紀元前2000年前頃に魏の曹操によって整理されたものが伝わっているというものにも関わらず、近代の軍や、それだけでなく会社の経営にも役立てるという話もあるくらいだ。

「それはわかんねんけどなあ。」

「まあいいじゃん。それではやては何を読もうとしてるの？」

「ああ、私はなあ・・・。」

そうして、会話を続けていく二人。二人ともとても楽しそうで、周りの人たちは微笑ましいものを見るような視線になってしまっている。一部、女性とのかかわりの少ない男性からの殺気に満ちた目線もあるが・・・。実に大人げないが、それも仕方のないことだろう。はやてはかなりの美少女で、光輝ははつきり言って不気味と云っていい容姿だ。もうちよっと歳をとったら、釣り合っていないんだよ、的な視線も混ざることだろう。

そんな視線に気付かずに、二人は世間話を続けていたが、やはり楽しい時間というのは早く過ぎ去っていくものであるため、

「あ、もうちよいで閉館時刻や。」

そう言いはやては車椅子を動かします。光輝もそれに続いて椅子から立つ。

「ん。じゃあまた今度、になるのかな？」

その言葉を聞いて、はやてはあからさまにがっかりした空気を出す。彼女にとって光輝との時間は人と触れ合える貴重なものなのだ。

「そうやね。私は明日は無理やし。」

会話をしながらも本を借りるために、司書のところに向かう二人。二人とも3冊ほど借りることにしたようだ。

「じゃあまたね。」

「じゃあまた。ていうかいい加減携帯買いよ。そのほうが連絡しやすいし。」

そうなのだ。光輝は携帯を持つてはいない。ていうか小学生の間はいらないと思っている。実際、彼の周りのクラスメイトでも持つてるのは少数派だ。

「俺の家にかけたらいいだろ。電話番号知ってるんだし。」

「そつやねんけど・・・。」

しょぼん。まさにその擬音が似合う雰囲気をはやては出す。携帯があればもつと話出来るのに、とその顔に書いてある。前世もあり、特に鈍感というわけでもない光輝は、一瞬ウツとなり、続けて「仕方ないなあ」とでも言うように溜息を吐いた。

「わかったよ。母さんに聞いてみるから。」

その言葉にペアッと顔を輝かせたはやて。そして会話してる最中にも本を借りる手続きを終え、図書館を出ていたこともあり、

「じゃあ、今度また会おう。電話するから。」

「りよ〜かい。じゃ、バイバイはやて。」

そついい手を振る。本当は家まで送っていくのが男としてはいいのだろうが、図書館からは二人の家は反対方向であるため、はやてが遠慮するのだ。

「バイバイ！こっ君！」

そう言いながらブンブンと手を振る。どうやら光輝が携帯を買うかもしれないというのがよほど嬉しいらしい。

そのまま光輝は家に帰るために歩き出したが、時々後ろを振り返るあたり、かなりはやてのことが心配らしい。そしてその度に未だに手を振っているはやてが目に映り、苦笑を浮かべるのだった。

「ただいま。」

家へと帰宅した光輝を待っていたのは良い匂いだった。どうやら夕食はもうちょっとで出来るらしい。そう思った光輝はまず図書館で借りた本を部屋に置き、それから洗面所で手洗いがいをする。このあたり、光輝はきっちり今の両親から躰られていたのだった。

そうしている間にも着々と夕食の準備は進んでいき、そして全員がそろったところで、

「いただきます。」

始まった夕食、今日のメニューはハンバーグのようだ。新タマネギの甘みがおいしい。まあ、個人的には食べ物の評価は「美味しい」か「まじい」だけでいいと思うのだが。料理番組は無駄に美辞麗句を言おうとしすぎて意味わからなくなっていると作者は思うわけです。

閑話休題（それはそうとして）

食事も終わった光輝は風呂に入る前に日課をすることにした。自分の部屋でカーペットの敷いてある床に直接座り、胡坐をかいて目を瞑り、瞑想（といっても真似事）をし集中する光輝。そうしてしばらくすると、光輝の前に氷の結晶が出来始めた。

これは光輝の鍛錬、テレキネシスの練習である。特に精密操作性に重点を置いた鍛錬だ。グラナ並みのテレキネシスをもらった、ということとその威力に関しては問題無いと確認を終えた上で結論付け、精密操作性を重点的に鍛えてるわけである。ちなみに今の訓練は空気中に存在している分子の中で水分子だけをより分け、その強力無比な力で無理やり凝固させた氷を使ってオブジェを作っているわけである。これだけでどれだけ凄まじい力かはわかるというものだ。

そうして力を行使すること数分、光輝の目の前にはとある世界遺産の寺院が出来ていた。純粹な氷を使って作られたそのオブジェはなんだか神秘的に見え、結構な値段で売れそうである。

「ふう、出来たか。」

そう言った光輝の顔は汗に塗れていた。当たり前と言えば当たり前のことである。これだけ緻密なものを造りだしたのだ。疲れるのは当然と言えるだろう。

「さて、どれだけ再現出来るかね。」

そう言ってパラパラと世界遺産の写真が載っている本を捲る。実はこの訓練は記憶力の訓練も兼ねていたのだ。抜け目のない少年(中身おっさん)だ。

「やっぱり写真に写ってないところは大雑把に成りがちなあ。ま、しゃあないか。」

そんな風に言っていると風呂場から音が聞こえた。風呂が溜まったのだ。

「今日は」」」までにしとくかな。使いすぎると頭痛くなるし。」

そうなのだ。「サイレン」に登場する人物並の力という注文をしたせいか、力を使いすぎると頭痛がするのである。

ちなみに「サイレン」を知らない読者の為に補足しておく、「サイレン」における超能力は脳の普通の人間では使われていない部分を使うことで行使するというものだ。そのため使いすぎると頭痛、鼻血、眩暈などの症状が現れる。

閑話休題(くわしくはウィキペディア見て)

そんなこんなで風呂に入った光輝はキッチンと宿題を終わらせ、明日の準備も終わらせてから眠りについた。

だいたい、こんな感じの光輝の日常である。

### 第3話

次の日、いつも通りに起きた光輝はいつも通りに学校に行き、いつも通りに特に誰と話すこともなく、いつも通りにぼっちな学校生活を終えて、家に帰ってきた。

いつもならここで図書館に行くところなのだが、昨日借りてきた本を読みきっていないことだし、はやても来ない、ということでもあるし、光輝は「じゃあ鍛錬でもするか。」という考えでもってジャージに着替え始めた。

実は光輝は1週間のうちの大半を唯一の親友であるはやたと遊んでいるのだが、彼女は定期検診もあるし、毎日遊ぶことは出来ない。大体週2くらいでそういう暇な日が出るので、そういう時に光輝は体を鍛えているのだ。

とは言うものの、そこまで厳しいことをしたりはしない。軽くジョギングなどをしたり、通信八極拳の型を一通り確かめるようにするだけである。

なぜならそこまで厳しくする必要がないからだ。実は光輝は寝てる時以外は常に体にテレキネシスで負荷を掛けている。常在戦場ならぬ常在訓練だ。リアル「この星は重力が 倍だから体が動かしにくいんじやろっ」状態である。ちなみに今はだいたい3倍くらいの重力を感じるような負荷を掛けている。子供のころから1・1倍、1・2倍、・・・と徐々に負荷を増やしていつてここまでできたのである。

体が壊れないぎりぎりの負荷を掛けることによる能力の制御力向上も兼ねたこの訓練のおかげで、光輝の身体能力は馬鹿げたことになっている。3倍の擬似重力の中で普通の子供並に動けるのだから、



それを解けばまさしく月に行った人間のように軽々と動けるだろう。光輝の体はまさしくこの負荷に耐える為に進化し続けているというわけだ。どこぞの火星のゴキブリ並の適応力だ。

その気になればt単位の力など楽々出せる光輝にとってこのくらいの負荷を出し続けるくらいは全然楽であり、最早マルチタスクばりに負荷をかけ続けることは片手間で出来るようになった光輝である。

そうしてロードワークを始める。その速度自体は普通だが、実はその背中には見えない力士が乗っていると知れば、誰もが驚愕することだろう。ちなみに光輝の体重は40kgを越えている。どれだけ高密度な筋繊維を持っているのだろうか。身長は普通の小学3年生であることを考えるとその筋肉の凄まじさがわかる。見た目はうっすら筋肉がついているようにしか見えないというのにだ。どこぞの戦闘民族TAKAMATI家もびっくりであろう。

見た目には普通のジョギング（実際には超非常識）を終え、光輝は結構広い公園についた。海鳴臨海公園である。人がいるにはいるが、それでも広いため人がいない空間というものも出来る。そこで光輝は通信で習った八極拳の型をし始めた。一つ一つの動きを確かめるように技を繰り返していくその動作に淀みはなく、流麗にすら映る。見るものが見れば「ほうあの歳にしてみれば中々の功夫だ<sup>カンフイ</sup>」と思うことだろう。ま、あくまでまあまあで「達人」と言うには程遠い。

そうして八極拳の「小八極」と「大八極」を終えた光輝。その顔には汗が浮かんでおり、前髪が顔に張り付いてしまっていて溺死してしまった人の幽霊にも見えなくもない。本人的には「今日も爽やかな汗を流したなあ」であるが、周囲の人から見れば爽やかな汗はかけ離れていた。人がいない場所でやっていて正解かもしれない。いたから確実に騒ぎに発展してしまっていただろう。

持ってきていたタオルで汗を拭き、スポーツドリンクも飲んで一息ついた光輝は、砂浜に向けて歩きだした。肉体面の訓練はこれで終わり、次はテレキネシスの訓練だ。

テレキネシスの訓練って家でやってるんじゃないの？と読者は思うだろう。あれはあくまで「精密操作性」の訓練だ。あれは毎日やっているが、これからやるのはこうして鍛錬に来た時にはあれとは別に「出力」と「範囲」の訓練をやっているのだ。

この2つの訓練をしようとした時、光輝は悩みに悩んだ。なぜなら、グラナ並みのテレキネシスをもらっているため、規模が大きすぎるのだ。全開でその力を使えば周囲への被害が大きすぎるのである。

そのために光輝は考えに考えた周囲への被害を出さずに行う、「出力」と「範囲」を同時に鍛える方法を。そして思いついた方法が今から行う鍛錬である。

砂浜にたどり着き、ここでも人目につかない場所に移動した光輝は力を使うために集中する。始めから全開で行使するのではなく、始めに弱い力を今から鍛錬に使う「範囲」に発生させ、人がいないことを確認する。そして人がいないとわかると出力全開にした。

「ん……」

傍目には何も起きておらず、ただ力んでるだけに見えるが、違う。よくみれば、数キロメートルの「範囲」の海が1メートルほど水位が上がってるのがわかる。

そう光輝はまさしく海を持ち上げてるのだ。といっても海面から1メートルくらいの深さの水だけだが……。それでもこれだけで「出力」の高さがわかっていうものだ。どこるか万々に達するだろ

う。

キロメートル単位の「範囲」で、万t単位の「出力」をたたき出し、ナノメートル単位の「精密操作性」を誇る……。それが今の光輝のテレキネシスのレベルだ。

とは言うものの、実験の結果「範囲」と「精密操作性」、「出力」と「精密操作性」は反比例することがわかっている。「範囲」と「出力」には特に相関関係は見受けられない。

そうして海をもちあげて3分ほどたっただろうか。海をゆっくりと降ろすと「ぶはぁ」と息を吐いた。その顔には先ほど八極拳の型をした時よりも激しい汗を掻いており、光輝の消耗の度合いが見て取れる。

（やっぱり全力だと数分が限度、か。）

その言葉通り今の光輝は全力の「出力」だと3分ちよつとが限度だった。これ以上やると頭痛がするだろう。これでも大分伸びたが、光輝は満足出来ないようだ。

（全力を出すことはないとは思っけど……。もしも考えると3分じゃあなあ。）

2tトラックの衝突で人が軽く死ぬことを考えると、万tの出力などそうそう出すことはないと思うが……。それでも光輝は「テレキネシスがあるから絶対無事」とは考えていなかった。自分の力は限りなく最強に近いとは考えているが、決して無敵とは考えていない。

孫子曰く「敵を知り己を知れば百戦危うからず」。逆に言えば、自分の情報が洩れれば洩れるだけ負ける危険が増すということだ。光輝

の力は確かに強いが、それでもその正体が知れてしまえば自分を倒す、いや殺すことは出来るだろうと光輝は考えていた。その正体がわかったところで弱点がほぼ無いテレキネシスであるため正面からあたればほぼ負けないだろうが、遠くから狙撃でもされたら死ぬだろう。故に光輝は決して今の自分に満足していなかった。

(理想じゃあ、全力を十分以上出せればいいんだけど……。そんならいあれば敵勢力が現れたとしても十分壊滅させれるだろうし。)

その思考はかなり物騒だった。いくら剣と魔法の世界と言われていたとは言え、そこまで行けば確実にどこぞのZ戦士並に破壊を起せるだろう。星の形を変える的な意味で。

(ま、嘆いても仕方ない。もしもが起こったら今の手札で切り抜けるしかないんだし。・・・鍛錬終わったし帰るか。)

そうして鍛錬を終えて家に帰る。光輝は知らない。今まさに、世界に魔法の力を秘めたものが降り注ぐとしていることを……。

t o b e c o n t i n u e

## 第4話

( 将来の夢、ねえ )

光輝は昼食を食べながら思考をめぐらした。今日の社会の授業、そこで先生が将来の進路についての話をしていたのだ。将来の夢ではなく進路であるところが私立らしいといえらう。

( つつても、剣と魔法に巻き込まれず平穩無事に過ごせればそれでいいんだけど…… )

逆に言えばそれ以外の夢を持っていない、ということだ。

( あるといえはあんだけど…… )

それは前世でもなっていたある職業だ。光輝は心底その職業が好きだった。いや正確に言えばその職業がしている行為が好きなのだ。……今の光輝はその職業に対して恐怖を抱いてもいた。その理由は……。

( やっぱ俺が殺されたのってそれが原因だよなあ。 )

そう、光輝が殺された理由の1つに確実にその職業が関わっているからだ。死ぬ間際の感情は何より強い、と何かの幽霊漫画で見たような気がするが、光輝の場合は正しくそれがあてはまる。その影響は見て分かるほど光輝の行動に現れているから……。光輝が剣と魔法に巻き込まれるのを恐れるのも死ぬのが怖いからである。

( ま、まだ小学3年生だし、そう深刻になることもないだろ。 )

光輝は知らない、自分のクラスメイトの運動音痴なある少女がそのことでかなりネガティブになっていることを。もっとも、光輝の考えが一般的であろう。高校生や大学生ならともかく、中学生以下の年齢の少年少女で将来について真面目に考えているのはごく少数の、その夢にかなりの情熱をついやしてる子供のみであろう。

そんなことを考えさせられた今日の学校であった。

「てなことを考えさせられたわけよ。」

「ふん。」

ところ変わってここは風芽丘図書館。いつものようにここで光輝とはやては世間話をしていた。その話題として今日の学校の社会の授業でも言われた将来の夢についてあげたわけである。

「まあ子供やったら具体的な将来の進路なんてないんが普通ちゃう？  
私もそっやし。」

「だよなあ。」

まあ、2人は普通の子供とは違う意味で将来が見えないのだが。はやては原因不明の病のせいであつて死んでもおかしくないし、光輝はいつ剣と魔法に巻き込まれるか、と警戒しすぎてるし。

「そや。夢って言えばな、今日おかしな夢見たんよ。」

「おかしな夢？」

「夢」つながりかはやてがそう切り出した。まあ夢は夢でも違う夢だが。

「うん。なんかな、林のなかで見たことない男の子と黒い怪物が戦う夢。男の子は手に持つてる赤いビー玉みたいなんから翠色の魔法陣を出して怪物に攻撃すんねんけど、結局怪物に逃げられてまうねん。」

今朝見た夢の内容を詳しく話していくはやて。しかしそれを聞いた光輝は動揺を隠すのでいっばいいいっばいだつた。

「そ、それは変な夢だな。」

(夢、ほんとにただの夢か？神様は剣と魔法の世界だと言つた。そして今の話……何らかの魔法的事象が起つていてと考えたほうがいいんじゃない。。。。)

神様は正確には剣と魔砲とSFの世界と言つたのだが、流石に8年も昔のことだけに曖昧にしか覚えていないようだ。

そしてはやての話から「非日常」が始まつたと推測する光輝だが、こゝである考えに行き着く。

(さてよ……。俺はそんな夢見なかった。もしもその夢の内容が魔法的事象の影響だとすれば、はやてにも魔法の素質があるってことじゃ……。俺は「テレキネシス」をもらっただけでそういうのは注文しなかったから、魔法的素質が無かったとしても不思議じゃないし。)

この考えにぞっとする光輝。もしも今考えたことが真実ならば、はやてが魔法的な非日常に巻き込まれる可能性が高いからだ。そして光輝は、確かに危険に巻き込まれたくないと思ってるが、親友を見捨ててまで安寧を享受するほど腐ってもいない。

(いざとなったら俺がはやてを護るしかないかな。)

そう覚悟、いや覚悟というほどのものではないが決意をする光輝だった。しかし、光輝が今いるのは図書館で、会話中でもあるので。

「じっ君ー」

「じっっー」

いつの間にかはやての顔が目の前にあり思わず仰け反る。ちなみにはやての顔が近くにあるのでその頬に僅かに朱が走った。はやては頬を膨らませ思いつきり「不機嫌です」とアピールしてる。

「なんだよ。そんなに顔近づけて。」

「なんだよ、じゃないわ。いきなり考えこんで。れでいとの会話中に考え事なんて失礼や。」

その言葉に思わず、といった様子で噴出してしまっ。



「ね、レディってどこにいるんだよ。」

「失礼なやつぢやな。目の前におるやん。」

「え？子狸しか見えないけど。」

「誰が子狸や！」

つつい大声で突っ込んでしまうはやてであるが、ここは図書館であるからして。

ジロツ!!

という擬音がつきそうなほどに周囲から睨まれる2人。睨んでる人の中には「図書館では静粛に！」という張り紙を指差してる人までいた。流石に「やってもーた」と思った2人は。

「す、すみません。」

そう素直に謝るしかなかった。

図書館から帰り、夕飯、鍛錬、風呂、柔軟、宿題、と一通りの日課を終わらせた光輝は今日のはやてとの会話を思い出していた。

(確証はない、根拠もないがなんとなく合ってる気がする。この町で魔法的事件が起こってる、というの考えは。)

そう思う理由は光輝がこの町で生まれ育っていることにある。

(あの神様は今回の俺の転生の方針はバトルを見るためだと言っていた……。そんな方針で転生させるのに、生まれる場所をただの平穏で暮らしやすい地方都市にするはずが無い。)

そう、光輝の転生の理由は「転生した人間のドキュメント番組を作るため」である。そして神様は今回の番組の方針は「バトル」とも言っていた。その為に戦闘の為に能力を特典としてあげるとも。

(今回のはやての夢、そしてその夢を俺が見なかったことから考えて、魔法を使うためには素質がいるのだろう。そしてその素質が俺やその他大勢の一般人にはないと考えてまず間違いはない。)

この考えには確信を持っていた。なぜなら、もしも魔法を使うのに素質がいらなかったら、「魔法」という便利すぎる道具を使わないはずはないのだから。

(魔法の素質を持つ人間が極稀なのだとしたら、魔法が世間一般で知られていないのも頷ける。)

光輝は剣と魔法の世界である、という神様の言葉を疑ってはいなかった。そんな小さな嘘を神様はつかないだろう、という考えもある

し、単純にあの神様は信じられそうだが、とも思っているからだ。

(極一部の人間しか恩恵を受けられない魔法と、世間一般の全ての人間がその恩恵を受けることが可能な科学。生存競争でどちらが勝つかなど自明の理だ。もっとも世間一般の人間が恩恵を受けられる魔法があれば話は別だが。)

科学の恩恵も、地球規模で見れば恩恵を受けていない人たちはいるが、それはともかく。

(なににせよ、これから魔法的事象に巻き込まれる覚悟だけは決めておいた方がいいな。)

光輝には、その「魔法的事象」に自ら巻き込まれに行くつもりはさらさらなかった。命の危険があるのに自らそこに近づくようなMな性癖ではないのだ。光輝は多少S気はあるがノーマルである。

(しかし、もしもはやてが傷ついたりしたら……。その時は全力で殲滅してやる。)

光輝ははやてのことをかなり大事に思っていた。まあ唯一の親友であるし、その親友が巻き込まれたら助けるといっなのはおかしな思考ではないのだが……。考えてることはかなり物騒だ。むしろその魔法的事象よりも光輝のほうが危険な気がする。

この時、どこかの家で鎖にまかれた本がぶるりと震えたとか震えていないとか、まあ関係のない話だ。

(まあ、いくら考えても答えは出ない、か。しばらくはそういうことがあるかもと警戒するしかないか。)

そう結論付ける。そして部屋の明りを消して、眠りにつくためにベッドに入り込むのだった。

次の日の朝、光輝はとある動物病院に車が突っ込んだというニュースを目にすることになる。

## 第5話

「ねえなのは聞いた？昨日の夜フェレットを預けていた動物病院に車が突っ込んだんだって。」

「あのフェレットさん大丈夫かな……。」

「じゃ、じゃはは……。」

その会話が聞こえてついそちらに顔を向ける。そのニュースは光輝も見ており、何故か無性に気になったのだ。

とそのとき光輝はその会話をしている少女の胸で輝くものを発見する。それは一見すれば赤い宝石のようなビー玉のようなものだった。

（確か、はやての夢に出てきた少年が魔法を使うのに使っていたものも赤いビー玉だったな。ただの偶然か？それにフェレットか。喋る小動物つてのはある意味で魔法少女物の王道だが……。現実にあるものなのか？）

その少女、高町なのはとその親友であるアリサ・バニングスと月村すずかの会話を本を読む振りをしながら聞いていると、かなり不自然であることがわかった。

（偶然帰り道の途中でフェレットを拾って、偶然そのフェレットを預けた病院で犯人の捕まっていない車の衝突事件が起こり、偶然その事件が起こる前に高町がフェレットを取りにいったら、偶然病院を抜け出していたフェレットに会っただと？とても偶然とは思えないな。）

はつきり言って魔法的な何かがあった、と言われた方が納得出来るくらい「偶然」が重なっていた。しかも、

(フェレットを拾ったのは林の中か。ますます怪しい。)

はやての夢で少年と怪物が戦っていたのも林の中である。そしてはやてはその怪物を少年が取り逃がしていた、と語っていた。もしも、もしも少年の位置を怪物が見つけたとしたら、自らに攻撃をしてきたものを怪物が見逃すだろうか？それはないと光輝は思う。

(恐らく、そのフェレットは夢の少年なのだろう。病院につれていかれるほどの怪我をしていたのも、怪物との戦闘で傷ついたのですれば納得だ。)

そして、その戦闘の場面がはやてにも伝わっていたことからして、魔法には何らかの通信手段があると思われる、と光輝は推測した。

(恐らく怪我の直っていないその少年すなわちフェレットが、通信手段を使って魔法的素質のある人間に救援を求めたのだろうな。そして高町がそれに応じた、と。)

そのことに齒噛みをする光輝。高町なのはが魔法的なことに関わっていないかったことは断言できる。そのフェレットとやらは自らの命の危険でしょうがなかったとは言え、一般人の少女を命の危険にさらしたのだ。その現場であった動物病院が車の衝突事故にあったかのような破壊の爪痕を残していたことから、生身の人間がそれに巻き込まれたら命など正に風前の灯火であることは想像に難くない。

いや、それだけじゃない。

(もしかしたら、あの高町の立場にははやてが立っていたのかもしれ

ない・・・！)

そう考えるだけで肝が冷える。高町なのはは運動神経が壊滅的に悪いが、それでも健常者なのだ。足に障害のあるはやてが巻き込まれたらどうなるか・・・。そんなのは決まってる。最悪の結果が導かれるだけだ。

(どうやら、今日は高町、ひいてはそのフェレットを調べる必要があるそうだな・・・。)

もしもそれで、はやてに危険が及びそうなら手を貸すつもりであった。もっともはやてに危険が及ばず、彼女らにも命の危険が無かったら傍観するつもりではあるが。

(ま、高町が死んでも目覚めが悪いし、もしもそんな事態になったら助けてやるか。)

あくまで積極的には介入するつもりが無い光輝であった。

そうして放課後になった現在。光輝は高町なのはを尾行していた。

尾行すると言っても子供の探偵ごっこみたいに物陰から物陰へ行くというものではない。

(やっぱりテレキネシスって便利だな。)

そう光輝はテレキネシスを使っていたのだ。どういう風に使っているか？それは……。

(光を捻じ曲げることによるステルスか。とてもじゃないがグラナ並の出力が無かったら無理だな。)

そう、光輝は自らの周りに力を使うことで、光を捻じ曲げていたのである。それでも出力全開ではないというのだから恐ろしい。

そうして高町なのはの後を尾けていた光輝だったが、そのとき高町なのはがいきなりピクン、とナニカに反応して、どこかを目指して走り出した。

(何か起こったか？)

そう思い走り出す光輝。鍛錬している光輝にとって運動音痴の高町なのはの速度についていくのは楽勝だった。そうして駆けること数分。たどり着いたのは神社の石段だった。そして高町なのははそこを登るうつとしている。

(じつやらの上でなにか起こってるらしい……。高町に合わせる必要も無いし、先に上がったくか。)

そうして上りきった光輝が目にしたもの……。それは黒い体躯に4本足。その顔には4つの目といかにも鋭そうな天に向かって反り上がってる牙を持つ狼のような化け物だった。明らかに地球上に生



息している生物ではない。

その姿に警戒心を高める光輝だが、その視界の隅になにかが入り込んできた。

(あれは・・・女性か？気絶してるようだが。)

そうそれは先っぽに何も繋いではいないリールを持った気絶してると思われる女性だった。そしてあの狼らしきものはその女性を視界に映しているようだ。

これは介入しないとまずいか？そう光輝が思ったとき、ようやく高町なのはが石段を登りきったようだ。

「ぜえっ・・・ぜえっ・・・。」

「原住生物を取り込んで・・・！」

その言葉を発するのは見た感じ茶色の毛並みを持つフェレットだった。喋る小動物、という光輝の予想は大当たりである。

「ど、どうなるの？」

「実体があるぶん、手強くなってる。」

その言葉に高町なのはは臆するでもなくこう言った。

「大丈夫。多分。」

しかし、気持ちばかり先走って行動には伴ってないようで、

「なのは！レイジングハートの起動を！」

そのフェレットの言葉にポカンとする高町なのは。そして、

「き、起動しててどうやるんだっけ。」

「え。」

その言葉の合間にも、狼らしき生物は高町なのはに標的を変更したようにある。

「我は使命をから始まる機動パスワード！」

「あ、あんな長い覚えてないよ！」

「もっかい言うから繰り返して！」

なんだか漫才のようなやりとりを繰り返す1人と1匹。ずいぶん余裕があるんだな、と光輝は逆に感心してしまふ。

「ガアアアアアアッ!!!」

そんなやりとりを狼らしきものが見逃すはずもなく、高町なのはに向かつて飛び掛った。

その瞬間。高町なのはの持っている赤いビー玉らしきものから桃色の光があふれ出す。

「レ、レイジングハート……。」

「Stand by ready・Set up」

その瞬間高町なのはを桃色の光が包み込み、一瞬後には赤い宝玉をつけた機械的な杖と、聖祥の制服を改造したような服を纏った、まさしくThe・魔法少女といった出で立ちの高町なのはが出現した。

(赤いビー玉が喋った?)

俄かには、信じられないことだが、光輝の力が、確かにあの赤いビー玉から空気の振動が発せられたと光輝に伝えた。

そんなことを光輝が考えてる間にも事態は進み、狼らしきものの突進を高町なのはが発生させた桃色の障壁が遮っていた。そしてしばらく拮抗していたと思ったら、狼らしきものを思いっきり弾き飛ばした。

「痛た……。っていつほど痛くはないかな。」

そんなことをのたまう高町なのは。度胸があるというかなんというか……。案外神経は凶太いのかも知れない。

「えっと。封印っていうのをすればいいんだよね。レイジングハーブ、お願いね。」

「All right・See you in mode set up」

その瞬間光の羽のような物を杖の先に生やし、そこから出した光の帯で狼らしきものの体を締め上げた。光輝のいるところからは見えなかったが、狼らしきものの額にはローマ数字が浮かびあがっている。

「Stand by ready」

「リリカル マジカル ジュエルシードシリアル16封印!!」

「Seeing」

「グアアアアアア・・・!!!」

そう呻き声をあげる狼らしきものの体が光輝く。そうしてその体から青い宝石が出てきた。その宝石は高町なのはの持っている杖の赤い宝玉部分に向かって飛んでいく。

「Receipt No.16」

そうして赤い宝玉に青い宝石は吸い込まれていった。それで安堵したのか、「ふう」と一息を吐く。

「これでいいのかな？」

「これ以上ないくらいに。」

「えへへ。」

その言葉に笑みを浮かべる高町なのはどうやら疲労もあまりないようである。

時間は過ぎて夕方になり、あたりがすっかりオレンジ色に染まった頃、気絶していた女性が目を覚ました。

「う、うん。あ、あれ・・・頭でも打ったのかしら。」

そう自分で結論付け、足元にすりよってきている子犬・・・あの狼らしきものの正体だ・・・を抱えて石段を降りていく女性。どうやら後遺症などはないようだ。

「お疲れ様、かな。」

「そうだね。」

その後姿を眺めながらしゃべる高町なのはとフレットどつやら無事かどうか起きるまで待っていたようだ。

「じゃ、帰ろっか。」

「うん。そうだね。」

そうして神社を後にする1人と1匹。その姿が見えなくなったところで、神社に唐突に1人の少年が現れた。言うまでもなく光輝である。

「なるほど、大体わかってきたな。」

光輝は今回の件で分かったことを整理する。

1つ。「この町に危険物である「青い宝石」があること。」

1つ。その名前は「ジュエルシード」といっぺんのこと。

1つ。その「ジュエルシード」は少なくとも16個はあること。

1つ。その「ジュエルシード」は生物に取り憑いて暴走すること。

1つ。高町なのはが魔法少女となってその「ジュエルシード」を回収していること。

1つ。どうやらフレットのほうが主体的回収者であり、高町なのははそれを手伝ってるらしいこと。

1つ。やはり高町なのはは魔法は初心者であること。

大体以上のことが今回の彼女らの会話及び行動から推測出来ることだ。

(確かに危険な代物であるようだが……。どうやら高町に任せていても大丈夫そうだな。ま、見つけたら下駄箱にいれるくらいはしといてやるか。)

結局手伝わないことに決めた光輝。中々に外道である。

(しっかし「リリカル！マジカル！」ね。年取ってから思い出したら黒歴史決定だろうな。)

そんなことを思いながら、光輝も神社を後にするのであった。

## 第6話

春の陽気で照らされら駅前広場。そこに一人の少年がいた。青と白のチェック柄の長袖のYシャツに黒のジーンズを履いている。それだけならどこにでもいる普通の少年なのだが、その目と鼻まで隠している前髪が彼をその風景から浮き彫りにしていた。その名前を宮崎光輝という。まあ、平凡からは程遠い少年だ。

今日は日曜日、光輝はここではやてと待ち合わせをしていた。はやてと遊ぶ、というのは光輝にとってもありふれた日常なのだが、今日はちょっとばかり意味が違っていた。

(あの「ジュエルシード」とやらがあるからな。なるべくはやてと一緒にいたほうがいいだろう。)

そう、今この海鳴市には危険物である「ジュエルシード」があるのだ。そのため光輝ははやてを護るために彼女の傍にいて護ろうとしているのである。

もちろん、光輝は父と母が心配ではないのかと問われるとそうじゃない。が、足に障害を負っているはやてのほうが危険度は高いため、こちらを優先しているということだ。

(それにはやてには魔法の素質があるかもしれないからな。)

よって光輝ははやてを護るためにも今日は一日の大半を彼女とともに過ごすつもりである。まあ、事情を知らない人から見れば普通にデートに行くだけなのだが。ちなみに光輝も光輝で彼女と過ごす日は楽しみなのである。

「じゅんくん…」

とそこで声をかけられた。関西地方独特のイントネーションであるその声を発した人物は言うまでもなくはやてである。光輝もその声に手を挙げることで応えた。

「ごめん。待った？」

「いや、今来たところだ。」

そんな会話をする2人。その台詞ははっきり言って待ち合わせをしていた恋人同士のそれにしか聞こえない。2人もそれは自覚が有ったようで、

「ふふ、なんや恋人みたいな感じやなあ。」

「ま、確かに一度は言ってみたい台詞上位には食い込んでるだろうな。」

「恋人」という単語が出たにもかかわらずちっとも慌てるようすのない男、光輝。はやてはそれが気に入らなかったようで、頬を膨らませた。

「なんやちよつとは動揺してもいいんとちゃうかな？」

「あいにくそんな初心じゃないんでね。期待はずれだったか？」

「ま、別にいいけど。ほな、遊びに行くで〜。」

「はいはい。」



そう言って自然にはやての車椅子を押し出す。その所作にぎこちなさなど微塵もなく。2人がどれだけ気安い仲なのかが見て取れる。

「で、今日はどこに行くんだ？」

「うん。どこ行っつか？」

「て、決めてないのかよ。」

「まあいいやん。」

2人は会話しながら歩いていく。どうやら特に行き先を決めることもなくぶらぶらするようだ。

どれだけ楽しい時間でも、それには必ず終わりというものが訪れるもので。2人、光輝とはやては今日という日を思う存分楽しんだようだが、既に時刻は夕暮れ時、もうそろそろ家に帰らなければならぬ時間となっていた。

「今日は楽しかったなあ。」

「そうだな。」

光輝もそれには素直に同意した。思わず「ジュエルシード」のことを忘れるくらいには今日という日を満喫した光輝である。

「もう帰らないと行けない時間だろ。家まで送ってくよ。」

「ほんまっじゃぁお願いするわ。」

家路に着く2人。本来ならばこのまま今日と言う日を終えたのであるのだが・・・。「災害」というのは何事も人がその脅威を忘れたところにやってくるものなのだ。

「トントントント・・・！」

「うおっ！」

「キヤアツ！何？地震か?！」

いきなり揺れだす地面。周りの人々もいきなりの事態に頭が混乱して冷静な判断が出来ていないらしい。と、そこではやてはありえないものを見た。

「こ、こっ君！あれ！なんやでかい木が生えとる！」

「なんだとっ！」

はやてが指差す方向。そちらには確かに伝説にある世界樹と呼ばれるにふさわしいような大樹が生えてきていた。明らかに自然現象ではない。その意味するところは・・・。

(くっ！ジュエルシードかつ！ここまで規模のでかい暴走をするとは。俺の見積もりが甘かったか！)

そうこれほどの規模で暴走をしていれば確実に犠牲者は出てるだろう。光輝の判断は甘かったと言わざるを得ない。せいぜいこの前の狼らしきものくらいの規模かそれよりチョイ上くらいの規模だと想像していたのだ。これは完全に想定外だ。

そのとき、光輝の足元からピシッ！ピシッ！という音が聞こえた。そして地面に亀裂が入り始めている。

「はやてー！」

「うわー！」

咄嗟にはやてを抱えて横っ飛びする。その直後、地面から木の根っこが飛び出してきた。はやてのいた場所にあった車椅子が粉々に砕け散る。もう少し判断が遅れていれば打撲ではすまなかっただろう。光輝はその場にはやてをおろし、その木の根っこに向かいあった。

その木の根っこはどうかやはやてを標的としているらしい。そのとがった根の先をはやてに向けて猛スピードで迫ってくる。

「キャッー！」

はやては咄嗟に目を閉じた。1秒後に迫り来る痛みを想像し、歯を食いしばっていたが、その瞬間はいつまでたっても来ない。恐る恐る目を開けると、驚愕で頭の中がいつぱいになった。

「はやてー！……手を出すんじゃないよー！」

光輝がその手で木の根っこを掴んで止めていたのだ。巨大な根っこの超重量の突進を見事にその小さな体で止めていた。

テレキネシスを使うことによって結構余裕で止めているのだが、周りの目には小さな子供がそれを成し遂げたのだから、かなりの膂力を持っていると誤解されたり。ま、誤解でもなんでもなく事実そうなのだが。

その状態を維持したまま周囲の様子を探る光輝だが、そこで意外な光景を目にした。

（はやて以外は襲われていないな。どうやら魔法的資質のある人間を優先的に襲ってるのか？）

そう判断した光輝は、周囲に注意を向けながらも、自らが掴んでる根っこを絶対に離さないように力をこめ続ける。

ギリツ・・・ギリツ・・・

何分かそうしていただろうか。その状況は唐突に終わった。

凄まじい轟音とともに大樹に向かって桃色のビームが迫る。何本か枝を伸ばしてガードしていたようだが、そのビームはそんなものは無意味だとも言うかのように枝を貫通していき、そして大樹に突き刺さった。するとなんとということでしょう。大樹が光の粒子に包まれていくではありませんか。

光輝が掴んでる根っこも光に包まれていき、そして消え去った。まるで夢のような光景だが、あたりに残された蹂躪の痕が、今起こったことが現実だと言っている。

「ふう。終わったか。」

「ごう君、大丈夫なん？」

はやてが心配そうに声をかけてくる。その目には親友が怪我をしてるんじゃないかという不安でいっぱいだった。

「あんぐらいで怪我しねえよ。俺は通信八極拳習ってるんだぜ？」

「いや、拳法習っててもあんな対処できひんやろ！」

光輝のポケに即座にツッコムはやて。どうやらもう大丈夫のようだ。

と、そこで光輝ははやてが地面に直接座ってるのを見てはつの悪いような表情になる。

「あゝ、悪いなはやて、車椅子壊れちまったみたいだ。」

「いや、ごう君が無事やったから別にええねんけど……。ほんまに大丈夫なん？怪我不いん？」

その言葉を聞いて何かを考えるようなしぐさをする。数秒後、ごうきはまるで悪戯を思いついた悪がきのようなニヤニヤ笑いをした。

「別に大丈夫ですよ？お姫様。」

そう言っちはやてを持ち上げる。右手を脇の下から通して背中を支え、左手は膝裏を支えている。所謂お姫様抱っこというやつだった。

「ひゃあ！な、何すんねん！」

「いや、車椅子壊れたからはやて抱えないと駄目だろ？」

そういつて本当にイイ笑顔をする。どうやら抗議の声を聞き入れる気はないようだ。

「それはそうやねんけど……。」

「ん？イヤか？」

「……べつにイヤやない。」

「素直でよろしい。」

そういつはやての顔は真っ赤に染まっていたが、どうやら満更でもないようだ。

そうして若きお姫様と超能力を扱う騎士は夕暮れに染まる街を家に向かって足を進めていくのであった。

「はやて、1・2キロ増えたな。」

「なんでそんな正確にわかんねん！」

スパーン！

## 第7話

話をしよう。聡明なる読者諸兄はもう宮崎光輝が「転生した人間のドキュメント番組」を作るために転生させられた世界が魔法少女リリカルなのはの世界であることは気付いてるだろう。ていうか原作欄におもっくそ書いてるし。

宮崎光輝自身は前世で見たことがないためそのことには気付いてはいないが、「ここは確かに「魔法少女リリカルなのは」の世界なのだ。

あるいはその作品をもとに創られた世界なのか、あるいはこの世界の情報が何らかの形で流出してそれを受信した人物が作品を創ったのかはわからないが、「魔法少女リリカルなのは」の世界であることに変わりはない。

しかし、「ここは確かに現実でもあるのだ。原作、という世界の外から見た歴史、正史とでも言うべきだろうか、は存在するが、その通りに進む保障などありはしない。

現実など、ほんの些細な偶然で変わってしまうものなのだから。

今も交通事故で「偶然」死んでしまってる人もいる。「偶然」宝くじに当たった人もいるかもしれない。「偶然」本来なら見つけられるはずのない魔法の資質が開花したものだっている。「偶然」転生の資格を得たものだっているのだから。

正史であれば、その「ジュエルシード」を発動させたのは海鳴臨海公園に植えられていた木だった。その木は正しく人面樹と言った様相の暴走体になり、雑魚敵であるにも関わらず障壁を発生させ攻撃を防いだが、高町なのはとフェイト・テスタロッサの共闘によって封印

されるはずであった。

しかし、もしも「偶然」にもその「ジュエルシード」を別の生物が発動させたら？「偶然」その海鳴臨海公園で鍛錬をしている少年が「偶然」その「ジュエルシード」の傍に行き、「偶然」その「ジュエルシード」がその少年が心の奥底で願っている渴望を読み取ったら？

今回は、そんな「偶然」が織り成した物語。

あの大樹の事件から10日ほどが経過し、連休明けの日。光輝は週2の鍛錬をしていた。走りながら目指すのは鍛錬にちょうどいい海鳴臨海公園である。八極拳の鍛錬だけなら山でもいいのだが、テレキネシスの鍛錬もあるため海の近くにある臨海公園が都合がいいのだ。

(あれから大規模な暴走は見受けられないな……。やはりあの時のが異常だったのか。)

走りながらの思考を巡らすのは「ジュエルシード」について。彼は部外者であるので、現状いくつまで回収できて、後いくつ残っているのかは把握出来ないのだ。



（あれ以来俺も探してみているのだが……。やはりそう簡単には見つからない。）

彼には魔法の資質はないので暴走した瞬間を感じ取れない。よって地道に探すしかないのだが、この地方都市海鳴で青い宝石を探すというのはやはり厳しいものがある。

（みつかったとしても封印出来ないから高町に届けるくらいしか出来ないしな。）

彼はあくまで目立つつもりはないのだ。危険蔓延る魔法の世界ではなく平穏なところで生きていきたいのだ。

そんなことを考えながら走っていると、いつの間にか海鳴臨海公園に着いていた。無意識のうちにもたどり着いているとは……。習慣とは凄いものである。

そうしていつものように人気の無いところで八極拳の型を始める光輝。自らのテレキネシスを使うときのように意識を研ぎ澄まし、体を動かすことによる力の流れを意識して技を繰り出していく。

そうして「小八極」と「大八極」、そして「六大開拳」と「八大招式」と行い、教本の体の動かし方に自らの動きが近づいてきたことがわかり、表に出さないようにしながら裏では満足げに笑っていた。

八極拳が終わったので次はテレキネシスか、とかばんからタオルとスポドリを取り出し、小休憩を取っているとそれが目に入った。

それは青い石のような物だった。それは六角柱のような形をしていた。それは中心にローマ数字が書かれていた。……。それは「ジユ

エルシード」と呼ばれているものだった。

「ブホッ！」

思わず嘖いてしまった光輝だが、それも仕方ないと言えるだろう。なにせ今まで回収出来なかった危険物がこんな身近なところにあっただから。

「ゲホッゲホッ！き、気管。スポドリが気管に入った……。」

しばらくむせていたが、落ち着いたところで周囲を見渡し、気が無いことを確認すると「能力」を使ってそれを取る。生物にとり憑くことがわかっているので直接接触するような愚は冒さない。

(にしても、こんなものがこの前みたいな大惨事を起こすんだから、魔法ってのは危険なもんだ。)

彼の能力もかなり危険なのだが、自らのことは棚に上げてるらしい。

と、そこで光輝にとって予想外のこと起きた。なんと目の前の「ジュエルシード」が光り輝き始めてるのだ。

(な、なんだと！直接は触ってないぞ！)

しかし、暴走し始めてることには違いない。咄嗟のことで行動が遅れてしまったのは致命的だった。

「うおおっ！！」

そうして光輝は光に包まれていった。

「はあっ！はあっ！」

高町なのはは急いでいた。なぜなら海鳴臨海公園にて「ジュエルシード」が発動したのを感じ取ったからだ。

(なのは、あそこーあの公園だ！)

頭に響いてくる声。初めらへんの頃は聞こえてくるたび驚いていたものだが、今ではすっかり慣れた念話だ。聞こえてくる声は彼女の肩に乗ってるフェレット、ユーノ・スクライアのものだ。

(う、うんそうだけど・・・。なんか人が多いね？)

(どうやらそこまで危険な発動はしなかったみたいだ。野次馬が集まってるみたいだね。)

ユーノ・スクライアはそう推測した。危険であるのなら人々は逃げ出すだろうからこの推測は間違っていないだろう。

とそこで公園で何が起こってるか高町なのは達にもわかってきた。  
それは……。

~~~~~

(これ、歌？誰か歌ってるのかな？)

(そうみたいだ。もしかしたら歌ってるのが暴走体かもしれない。)

そう現状を分析する2人。そして公園の入り口についた高町なのは視界に飛び込んできたのはたくさんの人々だった。

(うわ！本当に凄い人たち。)

(これじゃあ迂闊に魔法を使えない。結界を使って隔離したとしても目の前からいきなり暴走体がいなくなったら騒ぎになるよ！)

(ど、どうしようか……。)

(とりあえず様子を見よう。)

とりあえず様子見に決めたようだ。しかし、そのままでは暴走体の姿も見えないので、野次馬を掻き分けて最前列に出ることに。

「す、すみませ〜ん……」

そうして苦労しながらも前に出て行く。ようやく高町なのは目に飛び込んできたのは、ギターを弾きながら歌っている10人中10人がイケメンと言いつうな男だった。

~~~~~

その歌声は美しく、高町なのははその男の容姿もあいまってしばらく動けなくなってしまうた。

(なのは！)

「うわっ！」

ユーノ・スクライアの声で現実に戻ってきた。相当驚いたようすで声を出してしまっている。

(なのは、大丈夫？)

(う、うん。でもどうしよっか？)

おそう念話で相談している高町なのはだったが、その時、歌っている男が高町なのはに向かってウィンクしてきた。その姿があまりにも様になっているため、思わず胸がドキドキしてしまう。

(はうう。あ、あれってどういう意味なのかな？！)

(わ、わあ？！)

特に対策も出来ず、その場で立ち尽くすことしか出来ない。と、その時有り得ないことが起きた。

(ちょっと待ってな。歌い終わったらきちんとして渡す。)

(えー！)

(なんだって!!)

そう、それは念話。魔法の資質を持つてるものなら誰でも使えるほど簡単な魔法だ。つまり、その意味するところとは。

(・・・あなたは？ いったい？)

警戒を顕わに尋ねるユーノ・スクライア。それに特に気にした風もなく男は応えた。

(この青い宝石のおかげでいろいろ使えるようになったみたいだ。あんたらはこの青い宝石を集めてるんだろ？ 俺には必要ないからやるよ。ただ歌を歌いきらせるくらいはさせてくれ。)

(・・・わかりました。)

どどどやらその言葉に嘘は無いと判断したようだ。この場はおとなしく待つことにしたユーノ。

こうして、この日「ジュエルシールド」によって催されたゲリラライブは盛り上がりながらも問題なく執り行われていった。

ゲリラライブが終わった臨海公園。人気の無い場所で2つの影が

夕日のなか向かい合っていた。

「ほれ、ここなら人も来ない。遠慮無くやればいい。」

その声を発するのは先ほどゲリラライブを行っていた青年。近くでみるとその整っている顔がよく見える。

「わ、わかりました。」

その声を発するのは高町なのは。声の上擦っており、緊張している様子なのが伺える。

「レイジングハート！」

「Stand by ready・set up」

そうしてセットアップする高町なのは。桃色の光に包まれたあとには、魔法少女になっていた。

「リリカル！マジカル！ジュエルシードシリアル 封印！」

「See ining」

そうして光になる青年だが、そのとき言葉を零していた。

「願いが叶う、ね。どうせなら、あいつに会いたかったな。例え幻でも構わないから……。」

「え？」

高町なのはにも聞こえたその言葉。その真意を聞く前に青年から

青い宝石が出てきて、そして元の姿となって地面に横たわっていた。

「うっっっ」

その姿を見て驚愕してしまう。そこにいたのは高町なのはのクラスメイトでもある宮崎光輝だったのだ。この特徴的な前髪は間違いない。

「うっ、うっん。」

その目が開いていく。上半身を起こし、しばらく焦点の合わない目であたりを見ていたが、目の前の人物に次第に焦点を合せていった。

「あれ？高町か？てか夕方？俺鍛錬してたはずなんだけど・・・。」

「え、ええっと。・・・そ、そう！こんなところで寝てたら風邪ひいちゃうの・・・」

しばらくわたわたしていた高町なのはだが、どうやら記憶が無いと判断して「まかしにいくようだ。」

「ん、そうだな。じゃあ高町。俺は帰るからお前も気をつけて帰れよ。」

その言葉に高町なのはは安堵している。どうやら「まかせれたらいい。」

「じゃあね宮崎くん！こんなところで寝てたら駄目だよっ」

「ああ。じゃあな。」



そうやって別れる2人。高町なのは手を振ってるが、光輝はそれに手を挙げるだけで応える。

そうやってしばらく歩いたところで後ろを振り返ってみる。特徴的なツインテールはもう見えなくなっていた。

「あれくらいで騙されるって、あいつの将来が心配になってくるな。」  
そう、光輝はジュエルシールドにとり憑かれている間のこととは覚えていたのだ。ただそのことがバレると色々面倒くさそうだから忘れたふりをしたただけだ。

（願いが叶うね。ついつい「前」のことを思い出しちゃったな。）  
そう思う光輝の顔は酷いものになっていた。後悔と未練と渴望とがグチャグチャに混ざった顔。「前」、それはもう取り戻せないものだとわかってる。けれど・・・求めずにはいられない。

「葵……。」

その眩きは、海からの潮風にかき消されていった。

## 第8話

あの日、光輝がジュエルシードにとり憑かれてから2週間が過ぎた。え？飛びすぎ？いや、正直言って前回の話が無印で書きたい伏線だったので無印編で書くこと思いつかないんですよ。え？そこをなんとかするのが作者の仕事だって？はいその通りです。スーミマセーシデシター。

ま、まあとりあえず2週間たった。2週間たったのだ！大事なことになるので3回言いました。

その日、光輝はいつも通りに朝食を食べていた。ニュースを見ながら今日の朝食である味噌汁を吸う。

ニュースで流れてるのは最近よくある人気動画のコーナーだ。最近再生回数が伸びている動画を紹介している。

見るともなく見流しながら、味噌汁を啜っていると、キャスターが気になることをいった。

「次の動画は地方都市海鳴に突如現れ、それ以来何の足跡も辿る事が出来ない謎のミュージシャンによるゲリラライブの様を撮影したものです。その歌唱力やルックスから水面下ではファンが出来つつあるということですので、人気の程が伺えます。それではVTRどうぞ。」

そうして流れ始めるのは見たことのある公園で、ギターを弾きながら歌を歌っている青年の姿。歌もばっちり入っていて、その響きは耳に心地よい。

「ブホッ！」

味噌汁を盛大にぶちまける光輝。その見覚えのありすぎる光景に冷や汗がだらだらと流れ出て止まらない。

「ゴホッ！　ゴホッ！」

（と、撮られてたのか……。気付かなかった……。）

そう世はまさに国民皆マスコミ時代!! 人々は携帯を持って街に繰り出すのだ。

まあ、普通に考えてあんな派手なことをしたら、1人くらいは携帯のカメラで撮影して、動画投稿サイトに投稿しているだろう。気付かなかった光輝が迂闊なのだ。

「あれ？この男性ヒトなんだか光輝に似てないかしら？」

ギクツ！　その音が聞こえたと錯覚するほど体を強張らせながらも光輝は誤魔化すようにする。

「そ、そうか？俺がこんなイケメンに似てる？いや、そんなはずないって。」

反語である。（反語とは、疑問の形の文を持ってきておいて、それを否定することにより、より否定を強調するために用いる文法である。否定の文は省略可。）

そんな怪しすぎる息子の様子に気付きながらも、あえて知らない振りをする両親であった。光輝はその態度に感謝しながらも、会話の方向性を修正する。

こうして、なんだか異様に疲れる朝食を終えて光輝は今日も学校に向かうのだ。

学校は特に書くことも無いが、しいて言えば高町なのはがとある事情で1週間ほど休んでるくらいである。

放課後、帰宅して着替えた光輝ははやての家に向かっていた。今日は家で遊ぶ約束だ。家で遊ぶと言ってもゲームくらいでなんら特別なことは無い。

そうしてはやての家に着いた光輝は、ここでも朝の疲労を味わうことになる。

「なあこう君。これ見てみて〜や。」

「んっ。」

はやてが差し出してきたのはとある笑顔が絶えない動画投稿サイト。そして再生されている動画は朝のニュースでも放送されていた、ジュエルシードがとり憑くことによって大人化した光輝のライブ模

様。

「ふうん。で、これが何？」

これは、ニュースで放送されていたのだ。よってはやても見ているかもしれないと予想していた光輝は、表面上はなんでもない風を装っている。まあその額の冷や汗の量を見たらそのメッキは薄いことはバレバレだが。

「なんかこの人、こっ君に似てへん？」

「そんなことないだろ？」

ちなみに今ははやての家の中、光輝は前髪を上げて素顔を出しているため、はやても光輝の素顔を見ている。正直言って大人化した姿であるから、かなり似てるのでその答えはとても苦しい。

「ん？この人、こっ君と同じところに黒子あるなあ。」

「たまたまだろ。」

だらだらだらだら。時間が経つごとに光輝の冷や汗の量は増していく。光輝は「取調べを受けている人の気持ちってこんななのかなあ」と現実逃避気味に考えていた。

「あれ、この人ズボンのチャック開けっぱやで。」

「嘘だろっ！そんなはずは・・・あ。」

「計画通り」そんな笑みを浮かべたはやてを見て、やってしまったことに思い至る。

「やっぱりじつ君やねんやん。」

「はあ、誰にも言つなよ?」

観念して白状する。その顔は多少すっきりしており、やはり親友に隠しごとをしていたのはきつかったようだ。

「で?どんな変装技術使ったん?」

「ん?実はな・・・。」

そこでジュエルシードのことを話していく。なんでそんなこと知っていたのか?という質問については「とり憑かれたから。」で誤魔化した。

「にしても喋るフェレットに変身に危険物回収かあ。魔法少女ものの王道やね。」

「そうだな。ま、お前にも魔法の素質はあるかもしれないけど。」

「ほんまっ!」

「お、おう」

その剣幕に一瞬たじろいでしまうが、何故そう思ったかの推論を話していく。

「ま、だからはやてにも魔法を使える可能性はあるさ。あくまでも可能性だな。」

「ぶーぶー。そんな言い方せんでいいやん。」

「事実だ。いくら背が高かったって、正しいシュートフォームを身に着けないとシュートは入らないだろ。」

つまり、魔法の素質はあっても魔法のことを教えてくれる人がいないため、はやては魔法を使えないわけだ。

「いや、わからんで？いつか私も魔法少女に目覚めるかも。」

「魔法少女リリカルはやってっか？笑えないって……。」

そのまま他愛ない世間話を続けるはやてと光輝。2人は知らない。来る6月4日、はやての誕生日にまさしくはやてが魔法少女に目覚めることを。

G o f o r t h e    A · S !!

## A、S編嘘予告

ちよつとばかり平凡ではない私、八神はやてに訪れた突然の事態。

渡されたのは主の権利。手に入れたのは4人の家族。

出会いが導く偶然が、今光を放って動きだしていく。

繋がる絆と、始まる家族生活。

それは、親友と家族が交差する日々のスタート。

超能少年テレキスこうきA、S始まります。

「主からの魔力によって具現化した、命ある魔法プログラム。側にいることからって、<sup>スタ</sup>守護騎士!!!」

「君が！話すまで！撃つのをやめないの！」



「もういっばああああっ!!」

『旅の鏡』!!相手の魔力を奪っ!!」

「ス、スターライト、ブレイカー……。」

「なのは……。蒐集されてまで撃つなんて……。わかったよなのは…なのは『覚悟』が言葉でなく心で理解出来た!」

「いっちらキャラいよ。私たちの敵じゃねえ……。」

「いやー上だーヴィーター!」

「くらえっ!守護騎士!!半径20メートル!!エクスキューションシフトをおおおっ!!」

「これからはっ!」バルディッシュ・アサルト』と呼ぶっ!」

『魔力を蒐集する』部下も護る』両方やらなくてはならないのが、将のっらいとっろだな。」

「もう考えるの面倒くさいんだよおおっ!!!」

「カートリッジシステムを組み込むことで強化した魔法『プラズマランサー』には3つのプログラムを入れてある。1つ、前方に向けて高速射出。2つ、30メートル地点で魔力ホーミング開始。そして3つ、ホーミングは、2段階。」

「Devine buster extension」

「やれやれって感じなの。」

「しかし、その時点では闇の書の主はまだ凍結封印を受けるような犯罪者ではない。違法だ。」

(ふんっ！管理局員は違法だの道徳的にいけないなどと抜かして失敗する……。このギル・グレアムにそれはない。あるのは唯1つ！闇の書を永久封印するという目的のみよ！その結果を得られればいいのだ！過程や、方法なぞ……。)

「どつでもよいのだあああっ!」

「ぐっ!」

「魔力による目潰し！勝った！死ねい！」

「たすかる方法を教えて。どんな苦しみにだって耐える。どんな試練だって克服するっ!」

「今の表に出てる自動防衛プログラムを魔力ダメージでぶっ飛ばして！全力全開！手加減無しで！」

「さすがユーノ君！わっかかりやすい！」

「レイジングハート！カートリッジロード!!」

「Lord cartridge!」

「ぶっ壊すほど・・・シューッッッ!!!」

「ファイアリングシステム、オープン！」

「アルカンシェル発射！・・・薙ぎ払え!!!」

アルカンシエルの空間歪曲によって闇の書の闇の右側で空間が右回転！左側で左回転！そのあいだに起こる消滅反応はまさしく歯車の砂嵐の小宇宙!!

「リインフォース!!生きたいと言えええっ！」

「私は・・・!!生きたいっっ!!」

「」の予告はフィクションです。本編の人物、団体、事件とは一切

関係がありませんのでご了承ください

## 第9話

6月3日、初夏の暑さも感じられるようになってきた今日この頃。「ジュエルシート」の脅威も感じられなくなり、光輝も安心して日常を送れるようになってきている。光輝は今日もはやての家に遊びに行っていた。いつものような軽装ではなく、肩から掛けるタイプのかばんを持ってだ。

かばんの中に入っているのは着替え一式、タオル、歯磨きセット etc、etc。要するにお泊りセットだ。明日、6月4日ははやての9歳の誕生日であり、そして都合がいいことに休日であった。よって今日からはやての家に遊びに行き、泊まってそのまま明日は誕生日パーティー、というわけである。

「ふう、べつしてこうなった？」

疑問の体をとっているが、その答えはわかりきっているので、単なる愚痴であり確認作業である。光輝ははやての家に泊まるつもりなんて微塵もなかった(まだ子供であるものの、1つ屋根の下に男女が2人きりというのはどうかと思っただけ)が、はやての上目遣い+涙目+お願いというトリプルコンボには抗えなかったのである。

(上目遣い+涙目+頬赤らめ=破壊力萌えカだな。)

そんなどこぞの格闘漫画に出てくる公式の変形版なんてどうでもいいことを考えながらも、その足を進めていくのだった。

ピンポーン　　ハ〜イ〜

インターフォンを押して、中で家の主が返事をするのを聞きながら、光輝は今日は何して遊ぶんだろつか？と考える。そして「ま、いつも通りゲームなんだろうな」と思考を放棄しつつ、扉が開けられるのを待っていた。

しばらく待っていると、ガチャ、という鍵を開ける音とともに扉が開き、車椅子の少女が顔を出した。

「おかえりなさい、あなた。」

「夫婦じゃねえよ。」

早速ボケてきたはやてに辛辣なツッコミを浴びせつつ、家の中に入る。こんなボケでいちいち騒いでいたらはやての相手などしてられない。

「ぶーぶー。ノリ悪いなあ。」

「今のごっこにノル要素がある。」

そんないつも通りの会話をしながら、荷物をおく。なんだかんだでこの家には結構来ているので、どこに何があるのかは理解している。光輝は特に迷うこともなく洗面所にいき、1分もしないうちに戻ってきた。

「お、久しぶりに見たな、こっ君の顔。」

「そうか？」

はやての言葉通り、光輝は素顔を見せていた。前髪をあげ、肩までくらいある後ろの髪と一緒に一まとめに纏めてある。ポニーテールというわけではなく、ただ纏めて垂らしているだけだ。

今ここにははやて以外に人はいない。光輝が顔を隠す必要もないのだ。

「で、何する？」

「うん。そっやな。」

まあ、はやても光輝の顔を見るのは初めてではなく、光輝も自分の顔についての話題なんて至極どうでもいいので、何して遊ぶかはやてに聞く。いつもならばやては光輝にも意見を聞くのだが、今日明日の主役ははやてなので今日ははやてのしたいことに付き合うつもりの光輝である。はやてもそこらへんは理解しているので光輝には何も聞くことなく、しばらくうんうん唸って悩んでいた。

そうしてしばらく悩んだのち出した答えは、光輝の予想通りゲームだった。SmashでBrothersな大乱闘ゲームだ。はやては車椅子生活であり、自然アクティブな遊びは出来ない。よってテレビゲームなどの室内で遊べるものは結構豊富に揃っている。

ちゅーんーんー！　ピーカーピー

と、そこではやての操る電気鼠の足元がいきなり爆発して吹き飛ば

された。光輝の操る伝説の傭兵が設置していたリモートコントロール爆弾でやられたのである。

「ちょ、なんでそんな正確に爆破できるん？」

「ふふふ、俺の記憶力を舐めんよ？」

光輝は日ごろのテレキネシスの「精密操作性」の訓練の結果、かなり記憶力が良くなっている。初めは大体のイメージしか再現出来なかったのが、今はかなりの細部に至るまで再現出来るようになったほどだ。しかしこの男、精神年齢はもうおっさんのくせに9歳の少女に全力である。実に大人気なかった。

そんなこんなで、なんだかんだ言いつつも楽しく遊んでいる2人であった。

「じゅんじゅんま。」

「お粗末さまでした。」

そういつて箸をおく。今日の夕飯ははやてと光輝の2人がかりで



作ったものだ。鮭の塩焼きにわかめと豆腐の味噌汁、ほうれん草のお浸しと純和風なメニューである。しかしこの2人やっていることは夫婦そのものだ。

「じゃあ、皿洗いするわ。」

そのはやての言葉に待ったをかけるのはもちろん光輝。自分がい  
るのだからもっと頼ってくれたらいいものを、と思いながらも口には  
出さない。

「いや、俺が皿洗いするから。はやては休んでたらいい。」

「そう？じゃあお言葉に甘えさせてもらおうわ。」

そう言っ  
て居間に向かうのを見送りながら片付けを開始する。2  
つに別れているシンクの片方にぬるま湯を張り、そこに洗い物を投  
入。汚れが浮くまでの間にテーブルを布巾で拭いておく。その後  
に皿洗いを開始。洗剤を泡立てたスポンジで手早く洗い、水で流してい  
く。

(テレキネシス使えたらなあ。)

正直テレキネシスを使えばこんなことをするよりも遙かに早く、し  
かもナノ単位で綺麗になるのだが、はやてがいるためそれは出来な  
い。ていうかやっぱりテレキネシスの応用性が半端無い。まあこれ  
だけの応用性を誇るの  
はこれだけの強度があるからなのだが。グラ  
ナも自分を基準にして与えられた能力が皿洗いに使われそうになっ  
ているとは露にも思わないだろう。

そうして片付けを終え、居間で2人食後の時間をまったり過ごす。  
特に会話などは交わされてないが、嫌な沈黙、というわけではなく心

地よい雰囲気だ。

「じじく〜ん。」

「なんだ？」

「なんでもな〜い。」

「そうか。」

こんな感じでテレビを見ている。長年一緒にいるものだけが纏える空間をすでにこの歳にして形成していた。成熟していると言えはいいの、老成していると言えはいいの。判断に迷うところだ。

しかし、そこにはやてが爆弾をぶちこんだ。

「もうそろそろ風呂入らんなあ。」

「そうだな、じゃあ風呂溜めてくるか。」

「一緒に入るな〜。」

「ああ。・・・はあ？」

流れて返事してしまったが、思わず聞き返す。何世迷い言を言うてるんだこの幼女は？

「寝言が言いたいんなら寝かし付けてやるぞ？」

「寝言やないよ〜。」

「どっちら本気らしい。どっいつつもりなんだと怪訝な顔をする。

「いや、私足不自由やる？せやから、手伝って貰おうと思てな。」

その通りではある、あるのだが……。その顔がニヤニヤしてるせいでからかつ気満々なのが透けて見える。

そこで光輝は反撃に出ることにした。

「それもそうだな。じゃあ風呂溜めて一緒に入るか。」

「えっ?」

「ふむ。1人で入るのが辛いなら最初からそう言えばいいものを。それなら拒否することもなかったんだがな。」

「ええっ?」

はやての顔は真っ赤である。どっちらからかつ気だったのにいつの間にか一緒に入ることになっているので恥ずかしがっているようだ。光輝は本気(の)のように見える(顔)をしてるので、今更「冗談やで」とは言い出せないはやてである。

そして……。

「じゅうじゅう」

「どうしたんだ?はやて。そんなに赤くなって。逆上せたか?」

結局2人で風呂に入ることになっていた。光輝は何故はやての顔

が赤くなっているのか、その理由を知りながらも気付かないふりをする。その内心は人が人からかう時特有のニヤニヤ笑いを抑えるのでいっばいだ。

「何でこつ君は恥ずかしがらへんの……。なんか不公平や。」

「ん？何か言ったか？」

「何でもない」と答えてそっぽを向くはやて。実は何を言ってるのか聞こえてはいたのだが、聞こえない振りをした。「からかいすぎたかな？」とちよつとあせつたりするが、もう遅い。はやては拗ねてしまったようだ。

ちなみに光輝が恥ずかしがらない理由は「前」で婚約者がいたので、当然「そついう行為」も経験済みだからである。今更起伏の乏しいはやての裸体を見たところで羞恥心など沸いてこないのだ。光輝は口リコンではなく、「ごく普通の感性を持つノーマルなのである。はやてをからかって遊んでいるあたり、若干さつ気はあるが。」

「そろそろ髪洗つぞ？ほら」

光輝はそつ言つて手を差し出す。その手をはやてが掴み、そのまま浴槽の外へと出した。椅子に座らして、シャワーからお湯を出して準備完了。そのままはやての髪を洗い始める。目に泡が入らないように気をつけながら。なるべく優しく頭を洗つ。

「あ~~~~。」

「おっさんか？」

「だって気持ちいいんやもん。」

「そうかい。」

そう言って丹念に洗い、そしてシャワーで流す。そうして髪を交互に洗い会ったら、次は体だ。流石にこれは自分自身で洗う。

そんなこんなで、八神家の夜は更けていく。

それは、唐突に起こった。

もう時間も時間なため、寝ることにした2人。ここでもはやてのわがままに断ることが出来ずに、一緒に寝ることになり、興奮して寝ることが出来ないはやての話相手を光輝がしていた時だった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……!!

「キャッー!」

「ーっおっし!」

突如地震のような揺れが2人を襲う。瞬時にはやてを抱きかかえ何かあった時に行動できるようにした光輝の目の前にそれは浮かび上がった。

茶色い表紙に金色の剣十字の装飾をつけ、鎖に巻かれている本だった。歴史を感じさせる重みと威厳を感じ取れるその本は、はやてが生まれた時からあり、どうしても開かないのだと光輝は聞かされていた。

「な、何っ!??何なん?」

はやてもそれに気付いたようだが、それはこっちが聞きたいと光輝は思った。今も本はまるで心臓がしているかのように脈動しており、不気味なことこの上ない。

そうして、まるでち切れるように鎖がちぎれ、本のページがバラバラと独りでに捲れて行く。そのページは見ているかぎりでは白紙のようだった。

「Mich und aufloesus and die versieglung」封印を解除します」

その言葉が聞こえた瞬間、これは魔法がらみだ、と判断を下した光輝ははやてを護るためそれを破壊しようとした。だが、

「Anfang」(起動)

その言葉が発せられた刹那、はやてが苦悶の声をあげた。

「あああっ……」

「……はやてっ！」

即座に後ろを振り向いた光輝の目に飛び込んできた光景は、はやての胸から白く輝く玉が出てくるといふもの。さらに、その玉から今だに宙に佇んでいる本に向かって光が伸びていくところだった。

思考が乱れ、呆然とするしか無い光輝。はやても同様の反応を示している。

そうして、寢室の床に現れた魔法陣。かつて光輝が目にした物とは違い、頂点に円を配置した三角形の内側に本の表紙の装飾にも使われている剣十字が描かれている。その魔法陣が一際眩しい光を放った。

「キャッ」

「っっ」

その光に思わず目を瞑ったはやてと光輝だが、しばらくして目を開けると、その日何度目かになる驚愕で目を見開いた。

果たしてそこに在った、いや、いたのは4人の人間？だった。全員が全員ピッチリとした黒のインナーを着ており、まるで王に対する臣下の如く片膝を立てて跪いて顔を伏せている。そんな、少なくとも光輝にとっては怪しさ満点の人間が口を開いた。

「闇の書の起動、確認しました。」

「我ら闇の書の蒐集を行い、主を護る守護騎士でございます。」

「夜天の主のもとに集いし雲。」

「ヴォルケンリッター、何なりとこの命令を。」

この日、この時。八神はやてという少女の運命は静かに動き出した。

この先に待ち受ける試練を宮崎光輝はまだ知らない。



## 第10話

「闇の書の起動を確認しました。」

ピンクの髪をポニーテールに纏めた見た目20台前半の女性が、

「我ら魔力を収集し主を守る守護騎士でございます。」

金髪をふんわりボブカットにしたこれまた20台っぽいお姉さんが、

「夜天の主のもとに集いし雲。」

犬耳、尻尾をつけた白髪のマッチョな男が、

「ヴォルケンリッター、何なりとご命令を。」

赤い髪を一房の三つ編みにした7、8歳くらいの幼女が、

それぞれの口上を述べる。その間も顔は伏せたままだった。

「きゅ〜〜〜」

「っ！はやてっ！おい！」

許容量をオーバーしたのか、それ以外の原因か、はやてが気絶した。それに驚いた光輝が声を掛けるが、目を覚ます気配は無い。その光輝の声に、顔を伏せていた全員の顔が上がる。と、同時に警戒し始めた。

「オイ、テメー！主に何しやがった！」

赤髪幼女がそう吼える。しかし光輝はそんなものまったく気にならなかった。むしろそれは光輝も聞きたかったことだからだ。

「それはこっちの台詞だ。はやてに何をした？」

その声により警戒の色を強くする4人。光輝の声には明らかに怒気が含まれていたからだ。

光輝からしてみれば、はやての胸から出てきた玉から吸い取られるように光が本に伸びた結果、こうなったように見えたからだ。つまり、はやてが気絶したのはあの本の、ひいては本から出てきた4人のせいと光輝は思っている。

「答える。はやてに何をした？ 答えないようなら潰すぞ？」

その声には、長年戦場を駆けてきた4人でさえも空気が重くなったように錯覚するほどの威圧感がこめられていた。だが、威圧感にたじろぐほどヴォルケンリッターは柔ではない。すぐに臨戦態勢に入った。が、1人だけ予想外の反応をしたものがいた。

キーン……と澄んだ音を立てて飛来してくるそれを光輝は思わずキャッチする。そしてそれを投げた人物に目を向けた。

それはピンク色の髪の女性だった。それはどうやら彼女の独断のようで、他の3人も驚いた顔をしている。

「何だ、これは？」

「我がデバイス、炎の魔剣レヴァンティンだ。武器だと思ってくれて相違ない。」

そう答える女性。しかし、それは光輝の欲しい答えではなかったよ  
うで、

「何の真似だと聞いている。」

さらに威圧感を強めながら質問、いや、詰問する光輝に、女性は何  
でもないかのように答えた。

「私が生まれたベルカには、こういう言葉がある。曰く『平和の使者は  
槍を持たない』。」

つまり、戦闘の意思はない、と言っているのだ。その言葉に幾分か  
冷静さを取り戻した光輝は威圧感を引っ込めた。

「シグナム！どういっつもりだよ！」

そう赤毛の少女が問いかける。どうやらシグナム、というのがピン  
クの髪の女性の名前であるらしい。周りを見てみると、黙っている他  
の2人も同じ意見であるようだった。

「あの男の傍に主がいる以上、我らに出来ることは少ない。それにこ  
んな狭いところで戦闘を始めてしまったら、最悪主に被害が及ぶ。そ  
れは望むところでは無いだろう？」

その言葉につっ、と言葉を詰まらせる赤毛。どうやら反論出来ない  
らしい。

それに・・・、とシグナムは思考する。冷や汗を掻きながらも、そ  
れを表に出さないようにして。

光輝の出す威圧感、それを浴びた瞬間に、シグナムの将としての経験と勘が警鐘を鳴らしたのだ。「この男は危険だ。」と。

「潰す」。ただの子供の戯言にも聞こえる。だが、そうじゃない。この男には、やると言ったらやる『凄み』がある……！」

その考えから、即座に最善、つまり戦闘しないように行動した判断の高さは流石将であると言えよう。

と、その時。何やら思案している様子だった光輝が声をかけてきた。

「はやてが気絶したのはお前らのせいじゃないんだな？」

「そうだ。」

「あたりめーだ！」

光輝の質問に何を当たり前なことを、という顔をするシグナムと、声を荒げる赤毛。

「お前らにはやてを傷つける意思はないんだな？」

「我らは守護騎士だ。主を護ることはあっても傷つけるような真似などせん。」

そう答えたのは犬耳の男。どうやら「護る」という部分に誇りがあるようだ。

「そうか。なら、こちらも戦闘はしないと約束しよう。まずははやてが優先だ。気絶してるから病院に連れて行かないと。」

その言葉に待ったをかける声。それはシグナムからだ。

「少し待て。ここにいるシャマルは治癒魔法のエキスパートだ。どう  
いう原因で主が気絶したかも彼女が調べればすぐにわかるだろう。」

その言葉に光輝はしばらく沈黙する。どうやら信用に値するかど  
うか考えているらしい。数秒ほど思索して、

「いいだろう。ただし、はやてに妙なことをしたらどうなるか、わかっ  
てるな?。」

「わかった。シャマル!頼めるか?。」

「ええ。まかせてちょうだい。」

そう言ったのは金髪の女性「シャマル」だ。はやてのそばに行くと、  
その足元に翡翠色の魔法陣が展開される。しばらく目を閉じてその  
状態を保っていた。どうやらこれで調べているらしい。

数分経ったところで魔法陣は消え、閉じていた目を開いた。

「ふう。どうやら、長い間眠っていたリンカーコアが目覚めたことに  
よるショックで気絶したみたいね。特に心配することもないと思っ  
たわ。しばらくしたら目を覚ますと思います。」

その言葉を聞いて、光輝はあからさまにほっとする。その様子を見  
ていたシグナムは問うた。

「お前はどうやら主を本当に心配しているようだな?どういう関係だ  
?。」

その問いに、迷うことも無く即答する。

「親友だ。」

「そうか。」

その言葉に雰囲気や和らげられる。どつやら本当だと信じたようだ。

「それから、「お前」、じゃない。俺の名前は宮崎光輝だ。」

光輝は4人にそう名乗る。最低限の信用には値すると判断したらしい。

「そうか。名乗られたからには名乗り返すのが礼儀だな。私はヴォルケンリッターが烈火の将、剣の騎士シグナムだ。」

その言葉に続くように他の3人も名乗り始める。

「紅の鉄騎、鉄槌の騎士ヴィータだ。」

そう赤毛の少女が、

「風の癒し手、湖の騎士シャマルです。」

金髪ポブカットの女性が、

「青き狼、盾の守護獣ザフィーラだ。」

犬耳白髪 of 男性が名乗る。

「ぜひいいことが起こっているのか聞いておきたいところだが、2度説明するのも面倒だろう。はやてが起きたらその時に説明してくれ。」

「わかった。」

それきり沈黙の空間が広がってしまふ。1分、2分と過ぎ去っていく中、どうやらそれに耐えられなくなったのか、シャマルが空気を变えるように声を上げた。

「え、え〜と、主と親友なんですよね？この子はどどういう子なんですか？」

主がどどういう人物かも気になってたのか、そう質問をぶつける。光輝はしばらく考える動作をして、

「そうだな、簡単にだけ言っておくか。名前は八神はやて。明日、いや、もう今日か、に9歳になる。趣味は読書に特技は料理などの家事全般。まあ簡単にプロフィールを挙げるとこんな感じになる。」

「へえ〜。」

……………。会話が続かない。それも仕方ないといえるだろう。なんせ光輝とヴォルケンリッターは出会ったばかり、しかも最初はお互いに警戒していた間柄だ。そんな仲で会話を続けられるようなコミュニケーションは長い間闘争の輪の中にいたヴォルケンリッターはもちろん、この世界において友達がはやて1人しかない光輝も持ち合わせてはいない。この5人は完全にコミュ障なのだった。

この気まずい空気は、はやてが起きるまで続くことになるのだった。

## 第11話

「これから、闇の書の主として皆の衣食住の面倒を見なあかんっぢゅ  
うことやなー!」

(ああ、やっぱりこうなったか・・・。)

八神はやてのその第一声に光輝は予想通りだと嘆息した。はやての性格から考えてこうなるのは目に見えていたからだ。もっとも、守護騎士達にとっては予想GUYもいいところらしく、口を思いつきり開けて啞然としている。さっきまで警戒していた対象であり、どこかお堅いイメージを抱いていた4人のその人間臭い反応に、思わず苦笑してしまう。確かに、そのリアクションも仕方ないと思えたから。

はやてが守護騎士の面倒を見る、という決断を下した経緯について、至極簡単に纏めると

- ・はやて起きる

- ・闇の書についての説明

- ・主として面倒みるという結論を下す 今こじ

という感じだ。

その肝心の闇の書 はやてが持ってたあの鎖が巻かれていた表紙に金色の剣十字が施されている本の名前だそうだ とは、魔導師の魔力、正確にはそれを発生させる器官であるリンカーコア、を666ページ蒐集すると、大いなる力とやらが手に入る魔導書だそうだ。



光輝からすればはつきり言ってるさんくさい物だな、という感想を抱かざるを得ない。だって。ねえ？「大いなる力」って全然具体的じゃない。ていうか「闇の書」って名前からしてなんかoutだと思っ。

(ていうかザフィーラ現れた時「夜天の主に集いし雲」って言ってなかったか？闇の主とかじゃないの？)

そこも疑問点だったがとりあえず。

「あ、主、本当に蒐集しなくてよろしいのですか？大いなる力を手にすればその足も治るかもしれないですよ？」

「ようわからんけど、蒐集って人に迷惑かけんねんやる？やったらあかんわ。人に迷惑かけたらあかん。」

その言葉を聞いて光輝は感嘆する。やはり強いな、と。光輝は前もあるから精神年齢おっさんで、人に迷惑かけたらいけない、というのもわかってるし、我儘もあまり言わない。だが、はやては真正正銘9歳の少女なのだ。我儘を言いたいだろう。足だって直して自由に歩き回りたいはずだ。しかし、はやてはそれらと人に迷惑をかけることを天秤にかけ、自らの足は治らなくても、人に迷惑をかけない方を選んだのだ。

それが果たして9歳の少女としては正しいのか、歪んでるのかはさて置いて、並大抵の精神力ではその決断は出来ないだろうな、と光輝は思った。少なくとも同じ立場に立ったとして、その決断を出来る自信は光輝にはない。

ともかく、はやては蒐集をしないことに決め、守護騎士の衣食住を面倒を見ることに決めたのだった。当の守護騎士はそんなはやてに

対して、どんな態度を取ればいいのか戸惑っているらしい。

それもそうだろう。と光輝は考える。魔法については良くわからないが、それでも話を一通り聞いたところによると、守護騎士は「ヒト」ではないらしい。それに蒐集とやらをすれば大いなる力が手に入る魔道書だ。今までどのような扱いを守護騎士が受けてきたか、想像するのは容易い。

そんなこんなで、今までにない主の方針に戸惑い、主にそれで本当にいいのか、と確認を取る騎士と、あかんもんはあかん、とキツパリと断る主の様子を眺めていた光輝は、

(ま、とりあえず。)

もういい時間なので寝るように促そうか、とそういつ結論に至った。

昔の人は偉大だな、と目の前の光景を見てそんなことを考える。女3人寄れば姦しい。正にその通りだ。漢字として表しても、現実と

しても、この表現は正鵠を射てると光輝は益体もないことを考える。

ここは海鳴市にあるショッピングモール。現在光輝がここに来る理由は簡単だ。はやてに付き合ってる、それだけである。

昨日（時間的には今日だが、光輝的には寝て起きるまでが1日なのだ）はやては、守護騎士の衣食住の面倒を見るという条例を議決したわけだが、このうち住は問題無かった。もともとはやて1人が住むにしては大きすぎる家だったし、むしろ人数的にはちよūdイイと言って差し支えない。食も、はやてが料理上手なので、食材さえ買えば全然いける。

が、衣だけが問題だったのだ。ヴィータははやてのおさがりが入るので別に問題なかったが、シグナム、シャマル、ザフィーラが問題だった。

一応はやての両親の衣類が残っていたわけだが……。ザフィーラは、かなりガタイがいいので、一般的な日本人であるはやて父の服は入らなかつたし、シグナムとシャマルにしてもスタイル抜群なので（はやて曰くいいおっぱい）はやて母のが入らなかつたのだ。特に胸部が。腰はスキマがあるのに、胸はきつかつたらしい。全国の女性が羨むであろうスタイルだ。

そんなわけで、服を買いに来てるのだ。ちなみに光輝は荷物持ち件ザフィーラの方の見立て役だ。といっても、ザフィーラの分はもう買い終えている。後は女性待ちということだ。いつだって買い物は男性が女性を待ってばかりなのだ。誰だって、どこでだってそうなのだ。もっとも、ヴィータ、シグナム、シャマルがはやての着せ替え人形にされている、と言った方が正しいが。

（まったく。危機感というものが無いのかねえ。）

そういう気持ちになっても仕方ないだろう。確かに守護騎士は敵意は感じない。が、得体のしれない存在であることには違いないというのに……。

(まあ、あんな顔も出来るってことで。)

はやてに着せ替え人形にされている3人を見てみると警戒していた自分が馬鹿みたいだ。そう光輝は思ってしまう。でもまあ、はやても楽しそうだしいいか、とってしまうあたりこの男はもう駄目なのかもしれない。

「宮崎、といったか。」

と、そんな時、光輝に話しかける声。この状況では1人しかいないので、特にそっちを見る事無く会話に答える。

「何だ？」

「主はやては……優しいお方だな。」

「何を今更。」

そうだ。はやてが優しいことなど、光輝はずっと前から知ってる。そんなことは光輝にとっては当たり前で。でも、守護騎士にとって主が優しいというのは当たり前じゃなくて。

目の前では、歳相応にはしゃいでるはやての姿。それに振り回されてる3人は顔を赤くして恥ずかしそうで。でも、どこか楽しそうに嬉しそうだった。

「今まで何百年と存在してきた。何代もの主の下戦ってきた。もう思い出せないこともたくさんある。忘れられないことも。・・・だが、此度の主のことはきつと、ずっと忘れられない思い出となるだろう。」

そういうザフィーラの顔はとても優しく微笑んでいて。心底そう想っているのだろうと思わされた。

「我ら4人は常にもに在った。だが、あの3人があれほど楽しそうに笑つのを見たのは初めてかもしれん。」

ずっと一緒にいた仲間。その仲間が初めて見せる顔。そんな顔を見せるほどこの空気は暖かくて、優しくて。今までからは考えられないほど平穏で。だからこそ、より強く護りたいと思えた。

「我らはずっと鬭争の日々だった。主の命の下蒐集に明け暮れる毎日。・・・その時は疑問にも思わなかった。それが役目だと。こんな平穏な日々が来るなど予想だにしていなかった。・・・だが、こんな日常も、悪くはないかもしれんな。」

「・・・」

そこには血も涙もなく。ただ笑顔だけが咲いていて。

「今までは主さえ護ればいいと思っていた。・・・だが、今はこんな日常も護りたい、と思っている自分があるのだ。・・・だから、そのために力を貸してくれぬか？」

光輝にそう問いかけるザフィーラ。だが、そんなもの聞くまでもない。光輝の答えは決まっているのだから。

「・・・光輝でいい。」

「む？」

思わず聞き返すザフィーラ。その顔には何を言っている？という疑問が浮かんでいる。

「俺の名前だよ。これから戦友なかもになるんだ。苗字じゃ他人行儀だろ？」

そう言う光輝は不敵に笑っていた。歴戦の戦士であるザフィーラでさえも頼もしいと感じさせるほどで。

「ふっ。そうだな、よろしく頼む、光輝。」

ザフィーラにも笑みが浮かんでいて。そうやって並んでいる2人には確かに仲間と思わせる絆が結ばれていた。

## 第12話

それは守護騎士の衣服も買い終えた日の夜のこと。いつもよりも4人多い人数での食事をはやてが準備していた時のこと。おもむろに光輝にシグナムから疑問が飛んできたのだった。

「そういえば、光輝、お前は何者なんだ？」

「いや、はやての親友だって答えたよな？」

そう、昨夜にもシグナムは同じ質問をしていて、確かに光輝はその質問に「親友だ。」と答えたはずである。まさかもうポケはじめてるのか？と疑問が浮かぶが、そうじゃなかったらしい。

「そうではない。我らが現れたあの時、光輝は確かに「潰す。」と言っただろう？だが、この世界に魔法文化が無いことはもう分かっている。では、光輝はどうやって我らを「潰す」気だったのかと思っただけ。それに、魔法文化の無い世界の出身だったにしては、あの魔法的出来事に出会った時の対応はおかしかったとも思う。」

シグナムは、てっきり光輝はとてつもない実力を持った魔導師なのだと考えていたのだ。しかし、この世界に魔法は無い。けれども、あの時の光輝は確かな自信を持って「潰す。」と言っていたし、魔法にあまり驚いていなかった。そこが「おかしい」と思ったのだろう。

「えっ……「君そんなこと言ってたん？」」

「げ。」

光輝としては、あくまでテレキネシスのことははやてに秘密にして

いたのであまりその事には触れて欲しくなかったのだ。しかも、はやてが気絶したからといって冷静さを失いすぎてたあの時は、はっきり言って黒歴史ものだ。

うーん、と逡巡する。言うべきか、言わないべきか、迷ってるのだろ。十数秒ほど葛藤した上で光輝は話すことにした。

「はあ、じゃあない。言うよ、言いますよ。」

その眉間には皺が寄っており、どれだけ言いたくない、と考えているのかが見て取れた。そして光輝は渋々自らの力のことを話した。

「俺は確かに魔導師じゃない。・・・けど、超能力者なんだよ。」

「?? 超能力者ってなんだ?」

そう質問するのはヴィータ。なまじ魔法が身近にあるため、そういうフィクションに登場するようなオカルトや超常現象には詳しくないのかもしれない。

特に、彼らにとっての「魔法」とは魔力をプログラム式に沿って放出、展開することで、事象や現象を起こすものだ。どちらかと言うと「魔導科学」と言った方がニュアンスとしては正しいだろう。その恩恵を魔法資質のある人たちだけでなく、世間一般の人たちが享受出来るといふ点から考えても、「科学」の特徴を含んでいる。進みすぎた科学は魔法と変わらない、という言葉を地でいっているとと言える。

#### 閑話休題。

ともかく、守護騎士達は超能力については詳しくないらしい。が、ここに1人それを知っており、そして興味津々なお方がいた。



「えっ！ごう君って超能力者やったん?! どんなことが出来るん?! テレパシー!? それとも瞬間移動?!」

「いや、落ち着けて。」

キッチンから身を乗り出して聞いてくるはやて。その顔は興奮のせいか朱に染まっている。彼女は本好きのため、小説の中でしか見ないような存在が身近にいたという事実完全にスーパーハイテンションになってしまっていた。

そんな状態のはやてに溜息をつきつつ、光輝は自らが出来ることを語る。

「俺が使えるのは念動力テレキネシスだけだよ。正確に言うと念動能力者テレキネシストってわけだ。」

「その念動力テレキネシスってのはどんなものなんですか?」

「簡単に言うと任意の場所に力場を発生させる能力だな。ま、見た方がわかりやすいだろ。」

そう言って力を使う。テーブルの上に置いてあるクッキーが一人で浮かび、光輝の口元に運ばれていった。それを手で掴むでもなく、そのまま食べていく。その光景を見た守護騎士一同は驚き、はやては目を輝かせていた。百聞は一見にしかず。どんな力かは理解出来たようだ。

「ごう君すっごいな。ほんまに超能力者やん。」

そう感想を漏らすはやて。だが、シグナムは何やら考え込んでし

まっている。他の守護騎士は魔法以外にも超常の力があつたことに驚きを隠せないでいた。

そこで、シグナムが顔をあげると、ある意味で核心に至る質問をした。

「光輝、それはどれぐらいの強さの力を発生させられるんだ？」

その言葉に光輝は流石は将だな、という感想を抱いた。確かにテレキネシスという力を語る上ではそのファクターは欠かせないだろう。初めて見た能力であるにも関わらず、その力の重要なところを見抜いた眼力は脱帽ものだ。

「詳しい計測はしてないからわかんないけど、大体万々くらいだな。」

「「「「んなっ  
!!!????  
「「「「」

驚愕の声を上げる5人だが、まあそれも仕方ないだろう。万々の出力があつたら比喩的な意味じゃなく物理的な意味で「潰す」ことも可能だろうから。その光景を浮かべて、あの時争つようなことをしなくてよかつた、と心底思う守護騎士達だった。

だがここでん？と疑問を感じたものがいた。それは守護騎士の中で治療・補助・作戦立案などの後方支援の役割をもつ湖の騎士である。

「あれ？でも、光輝君の魔力はせいぜいDランクなのになんでそんな出力があるんですか？」

「え？俺にも魔力つてあるのか？」

「あ、はい。平均より少ない量くらいですが。」

その言葉に光輝は驚いた。なぜなら光輝は「ジュエルシード」事件の時の出来事から自分に魔力資質は無いと推測していたからだ。これは根拠や証拠はない仮説だったが、状況から考えて限りなく事実に近い推論だろうと思っていた。

(考えられるとしたら、あの時俺に憑いた「ジュエルシード」か？その時後天的にリンカーコアが体に発生したとか……。ま、推論の域を出ないし、事実としてあるんだから別にいいか。あつて困るもんでもないだろうし。)

光輝は考え込んでしまったが、別にいつかと思うことにした。真実かどうかという原因かは知らないが、自らにそれがあるなら有効活用するだけだ。元々、自分に資質がないというのも仮説でしかなかったわけだし。

「光輝君？」

と、シャルマルが訝しげに声を掛けた。それで自分が考え込んでしまっていたことを自覚し、先のシャルマルの質問に対する答えを返す。

「ん〜。俺の超能力は魔力を消費しないんだ。」

「はあ!? そんなん反則じゃねえか!」

ヴィータが声を荒げる。もっともそう思い込んでしまつのも詮無き事だろう。魔力も必要とせず、万々の力を発生させることが出来る力……。はつきり言って守護騎士の価値観からすれば勝ち目など無かった。

ヴィータのその勘違いに気付いた光輝は、誤解を解いておくことに

した。

「ああ。いやもちろん使用限界はあるぞ？あんまり使いすぎたら頭痛くなるからな。本気で使えば3分ぐらいで頭が痛くなり始める。」

もちろん、頭が痛くなっても使うことはできるが……。余りにも使いすぎたら脳がパーンッ的なことになる。

「なるほど。やはりどんな力であるかと何らかの消耗はするということが。」

「まあな。ま、あくまで本気で使えばだから、本気で使わなかったらいいんだけど。」

「それでも反則っぽいんですけど……。」

「いや、もって出力でる時点で反則やけどな？」

「それにしても超能力か、長年生きてきたがまだまだ知らないことも多いな。」

「んなもんがあるって、この世界ってなんなんだ？」

そんな、光輝の超能力の話は結構な盛り上がりを見せることとなっていた。

夕食も食べ終わり、もういい時間となっていた。明日は学校があるため今日は帰宅する光輝。それを見送るために玄関まで来ていたはやてである。今までであれば、はやてはこれから家で1人であった。だが、これからは違う。明りの点いた家からは新たな家族守護騎士の声がある。

「これから賑やかになるな。」

「うん。でも皆ええ子やから。心配いらへんよ。」

その言葉に苦笑してしまう。まだ1日しかともに過ごしていないのに、はやては莫大な信頼を守護騎士に置いていた。もうちょっと警戒というものを覚えて欲しいと思うと同時に、あの4人なら大丈夫か、とも思う。

「そうだな。俺もそう思うよ。」

「やるっ。」

「じゃあ、また明日。」

「うん。また明日。」

そういって手を振りながら後ろを向いた光輝だったが、途中であることを思い出してはやての方に向き直った。そして自らのかばんをゴソゴソと漁る。

はやてが首を傾げていると、光輝が何かを取り出した。それは包装紙に包まれた細長い箱。それをはやてへと渡しながら告げた。

「ハッピーバースデー、はやて。」

その言葉に呆けるはやて。今日は色んなことがあったから、自分の誕生日だということを忘れていたらしい。

「ま、もうすでに最高の誕生日プレゼント新たな家族を貰ってるから、有り難味はないかもしれないけど。」

「いやーそんなことないよ。・・・何か見てもいい？」

「ああ。」

包み紙を剥がして中をあけてみると、それはネックレスだった。シンプルな十字架の意匠のネックレス。闇の書の装飾に使われてる剣十字とは違つが、ちよつとかぶつちやつたかな、と光輝は苦笑した。

それを見つめていたはやては、その十字のネックレスを胸へと掻き抱いた。その頬は真っ赤に染まり、口は意識してないにも関わらず笑みを形作る。どうやらお気に召したようだ。

「ありがとう。こつ君。・・・めっちゃ嬉しい。」

「そうかい。それはよかった。」

しばらくそのネックレスを握り締めていたはやてだが、はたと、何かに思い至ったたようだ。

「ごっ君、このネックレス着けさせてえや。」

「ん、わかったよ。」

はやてからネックレスを受け取り、後ろへとまわる。はやてが髪を持ち上げ、ネックレスをつけ易いようにした。その白いうなじが顕わになる。

はやてを抱くかのように腕を出し、そしてネックレスをつけていく。その光景はまるでどこかの宗教画のように幻想的で美しく、壊してはいけないと思わせるものが漂っていた。

ネックレスをつけ終わったので前にまわる。はやての胸で十字架が輝いている。光輝はそれを見て素直な感想を述べた。

「ん、似合ってる。」

「えへへ。ありがとうな。」

そういう2人の間にはイイ空気が流れる。所謂甘い空間である。だが、そんなピンク色の空気をぶち壊す闖入者が現れる。

ガタツ、ドタドタドタツ！という音が聞こえ、そちらに目を向けると守護騎士女性陣が倒れて山になっていた。どうやら覗いていたらしい。その後ろではザフィーラが溜息を吐いている。

「ちよ、重いつてー！」

「だから押すなど言っただろう。」

「あ、あはは。」

「何をやってるんだ。」

その光景を見てから、見つめ合う光輝とはやて。その後で思わず笑いあう。新しい家族、ちよつと普通ではないけれど。でも、これから平凡でも楽しい、笑顔が溢れる日々を送ることが出来るだろうという確かな予感をこの場にいる誰もが持っていた。